

---

# 手話学研究

---

第31巻 第1号 (2022年)

日本手話学会



- 〈論文・査読〉 **日本手話にみる指漢字と表語音節語** 1  
超拡張記号図式と圏論による  
形訳・義訳・音訳機序の記号論的考察  
末森 明夫
- 〈研究ノート・査読〉 **手話辞書学の構築における記号論的接近法** 22  
「日本語→日本手話・対訳辞書」の  
記号図式と記号過程にみる換喩的描写と提喩的一般化  
末森 明夫

# 日本手話にみる指漢字と表語音節語

超拡張記号図式と圏論による形訳・義訳・音訳機序の記号論的考察

末森 明夫

国立研究開発法人産業技術総合研究所

本稿は超拡張記号図式を用い、指漢字にみる形訳機序と表語音節語にみる義訳機序および音訳機序が音韻極、書記極、手話極、意味極の4極より3項関係を構築し、有意意味極同士ないし非意味極同士を関係づける記号過程を図式化し、形訳、義訳、音訳の機序にみる個別性および共通性を可視化した。続いて圏論における関手圏を用い、形訳、義訳、音訳の機序が3項関係の関手圏における自然変換により構築され得ることを図式化し、形訳、義訳、音訳の機序が自然変換を通じた圏論的な同じさを示すことより、指漢字と表語音節語にみる機序を体系的に把握し得ることを可視化した。さらに形訳機序にみる有意味極と非意味極の変換を記号階層図ないし記号接地階層図に連関布置し、指漢字や表語音節語が範疇界を中心に類像界と象徴界の間にまたがる動物的通路(=範疇的表出)を往復する動態的様相を詳らかにした。漢字や仮名の影響の下に造語された指漢字や表語音節語の造語機序は、漢字文化圏における手話言語造語機序の個別性であり、音素文字文化圏における手話言語からは窺いにくい。指漢字や表語音節語が示す文字性と図形性の重層性および動態性を音素文字文化圏の手話言語に投影することにより、漢字文化圏と音素文字文化圏にみる手話言語造語機序の普遍性を可視化し得るものと考えられる。このような象徴界における言語記号、範疇界における言語性と非言語性の区別が困難な記号、類像界における非言語記号を包摂する手話言語造語機序の理論化は手話言語学を包摂する手話記号論の拡充に資するものとも考えられる。

キーワード: 日本手話 指漢字 表語音節文字 超拡張記号図式 圏論

## 1. はじめに

### 1.1. 指漢字と表語音節語

音声日本語話者は悠久たる時間の下に、漢字、ラテン文字やアラビア数字を受容すると共に、仮名<sup>かな</sup><sup>1</sup>を編み出し、漢字と仮名が混在する書記日本語を構築してきた(福島 2008)。一方、日本手話使用者も日本手話の獲得と書記日本語の習得を通して、仮名

に関係づけられた指文字<sup>2</sup>や数字に関係づけられた指数字を編み出してきた。

なお漢字を指示対象とする日本手話語彙は、漢字「A」<sup>3</sup>の中心義に関係づけた手話単語【B】<sup>3</sup>を借用する例が多く、このような手話単語を本稿では義訳語と呼ぶ。もっとも日本手話使用者は義訳語とは別に、漢字を指示対象とする指漢字や表語音節語を編み出してきた。

1 本稿では平仮名と片仮名を併せて仮名と呼ぶことにする。

2 漢字と仮名を併用する書記日本語と接している日本手話では、仮名と関係づけられた指文字は「指仮名」と呼び、「指仮名」と「指漢字」、「指数字」を合わせて「指文字」と呼ぶことが望まれる。ただ本稿では便宜的に指仮名を指文字と呼ぶことにする。

3 本稿では漢字を「」、漢字の中心義を《》、図形としての漢字字体や漢字部品を『』、仮名を[ ]、手話単語/指文字を【】、手話複合語を【手話単語/指文字+手話単語/指文字】、手話単語の中心義を《》で囲むものとする。また手話単語の構成要素を〈手形〉〈掌向〉〈位置〉〈動作〉とする。

指漢字は【井】や【介】のように漢字の『字体』<sup>3,4</sup>ないし『部品』<sup>4</sup>を手指で象るもので、本稿では形訳語と呼ぶ。また表語音節語は手話単語【腹】で「原」を示すほか、手話複合語【聾+損】で仮名[ロー+ソソ(=ローソソ)]<sup>4</sup>を示すなど、漢字「C」と同じ読み[D]をもつ漢字「E」の義訳語【F】を借用するものであり、本稿では音訳語と呼ぶ。義訳、形訳、音訳は漢字や仮名をはじめとする書記日本語語彙を日本手話語彙に変換する記号過程であり、義訳は翻訳、形訳は翻字<sup>5</sup>、音訳は翻音<sup>5</sup>に該当するものと考えられる。

日本手話にみる指漢字は、松田・鈴木(1939)が漢数字を紹介した例に続いて、米川(1979)、宇賀神(1986)、竹村ほか(1988)が指漢字の編輯を試みている。また Smith & Ting(1979, 1984)、宮本(2001, 2002)、Flaherty(2003)は中国手話<sup>6</sup>群<sup>7</sup>にみる指漢字を編輯し、Fu & Mei(1986)、Ann(1998)、Su & Tai(2009)、張(2011 a, 2011 b)は台湾手話<sup>6</sup>にみる指漢字群を編輯している。一方、日本手話にみる表語音節語については、宇賀神(1986)や竹村ほか(1988)が聾学校の授業で用いる表語音節語の編輯をはかっている。しかし日本指文字の造字機序に関する浩瀚な知見の蓄積(神田 1986、井口ほか 2019)に比べると、指漢字や表語音節語の研究は語彙論的考察に留まり、造語機序の体系的な考察は発展途上の段階にある。

## 1.2. 日本と欧米の手話言語学

漢字を指示対象とする指漢字や表語音節語の造語機序の分析には、漢字を題材とする文字論の援用が有望である。しかし欧米をはじめとする音素文字文化圏にみる言語学では「音素文字は音声言語

の写しにすぎない」という言説が支配的であり、音素文字を題材とする文字論は言語学における傍流に甘んじてきた。日本をはじめとする漢字文化圏においては訓話学や漢字学の伝統があり、西田(1986)や河野(1994)が漢字や仮名を題材とする文字論を提唱してきた。しかし峰岸(2006)は「現在の日本にみる言語学において、日本語を対象としながらも『西欧諸語から見た記述』になってしまっている例が少なくない。」と述べている。

もっとも昨今の音素文字文化圏にみる言語学では文字論の再構築をはかる動きがあり(Sampson 1985, Daniels & Bright 1996, Coulmas 2003, Rogers 2005, Krämer et al. 2012)、日本でも黒田(2013)や加藤・岡墻(2021)が漢字や仮名の動態的相互作用に焦点をあてた漢字文化圏における文字論の再構築をはかっている。漢字文化圏における文字論の地平に関し、関沢(2015)は「アルファベットを中心とした文字観が打ち立てる傾向がある『アルファベットと漢字との過渡の対立』とは異なった道を探究していく」と述べている。

一方 Stokoe(1960)を嚆矢とする現代手話言語学は音素文字文化圏にみる手話言語を題材として発展し、漢字文化圏における手話言語学にも資してきた(北村 2008)。しかし音素文字文化圏における手話言語学の言説を援用した指漢字や表語音節語の造語機序の分析にはおのずから大きな困難が伴った<sup>8</sup>。

昨今の文字論に鑑み、本稿では漢字を指示対象とする指漢字や表語音節語の造語機序や派生事象に焦点をあて、漢字文化圏にみる手話言語群の個別性を可視化すると共に、それを音素文字文化圏の手話言語に投影し、漢字文化圏と音素文字文化圏

4 本稿では字体を「書体内に於て存在する一々の漢字の社会共通の基準」(石塚 1984)、部品を「形態的凝集性を保有し得る漢字の構成要素」(早川ほか 2019)とする。

5 本稿では「翻字」や「翻訳」という用語との整合性に鑑み、「転写」ではなく「翻音」という用語を用いる。ScriptSource(2019)は「翻字と翻音は双極的連続体をなしているものの、翻字は主に他の文字の書記を正確に表現することに関係し、翻音は主に音素を表現することに関係する。」と述べている。

6 中国や台湾では「手話」という用語を用いている(あべ 2012)。韓国では従来は「手話」を用いていたものの、昨今は「手語」が優勢になりつつある(イ 2019)。

7 中国には北京手話、上海手話、広東手話をはじめとする多様な地域変種がある他、中国政府が推進している共通手話がある。そのような現況を勘案し、本稿では「中国手語群」という用語を用いる。

8 石田・東(2019:40)は、ソシュールの言語学・記号学をエクリチュール(=文字)を対象とする学問からパロール(=音声による発話)を対象とする学問への転回として位置づけた。このような観点に基づけば、書記体系をもたない手話言語を対象とする手話言語学は、ソシュールの言語学・記号学の恩恵を受けているものとも言える。しかし漢字文化圏における手話言語学にとっては、それが仇になってしまい、手話言語と文字の相互作用に関する考察が遅れてしまったとも言える。

の手話言語における普遍性を可視化することにより、手話言語学に資する。

### 1.3. 手話言語学と記号論

Eco (1976) は「一般記号論の輪郭として考慮すべきことは、コードの理論、および記号生産の理論である...後者では、日常的な言語の使用、コードの進化、美的伝達、さまざまな型の相互作用の伝達行動、世の中の物事について言うための記号の使用、などといった広範な現象が考慮の対象となる」と述べた。

日本における手話言語学は、1950～1960年代は「記号生産の理論」を重視した日本手話の記号論的接近法がはかられた(岩井 1954、鎌田 1964)。もっとも昨今は「コードの理論」を重視した接近法が主流を占めており、「記号生産の理論」に焦点をあてた接近法は類辞語<sup>9</sup>の範疇に留まる傾向が強い。しかし形訳、義訳、音訳の造語機序は漢字や仮名を記号過程に内包する点において、類辞語と固定語<sup>9</sup>の間にみる記号過程とは異なる機序が働いているものと考えられる。

黒田 (2013、2015、2016) は拡張記号図式<sup>10</sup>を用いて、振り仮名や当て字の機序を体系的に考察し、書記日本語を対象とする文字論の構築および記号論における布置をはかった。また昨今の人文社会領域においては、圏論を用いて傍目には大きく異なるかのように見える複数の事象の間にみる「本質的な同じさ(=同型)」を記号論的に図式化する手法が提唱されている(西郷・田口 2019)。

本稿では拡張記号図式や圏論を援用して、漢字や仮名をはじめとする文字と手話言語の相互作用を

内包する形訳、義訳、音訳の造語機序の個別性と普遍性を図式化し、文字論や記号論と手話言語学の融合を包摂する手話記号論の構築に資する。すなわち第2章で形訳語、第3章で義訳語、第4章で音訳語の輯輯をはかり、第5章で超拡張記号図式、第6章で圏論、第7章では記号論を用いた形訳、義訳、音訳の造語機序の分析をおこなう。

## 2. 形訳語

形訳語には漢字の『字体』を手指で象ったもの(=字体形訳語)と、漢字の『部品』を手指で象ったうえで『字体』を指示対象とするもの(=部品形訳語)がある。表1に〈動作〉<sup>3</sup>を含まない字体形訳語彙、〈動作〉を含む字体形訳語彙、〈空書〉<sup>11</sup>を含む字体形訳語彙、〈動作〉を含まない部品形訳語彙、〈動作〉を含む部品形訳語彙、〈空書〉を含む部品形訳語彙、非手指部分を含む部品形訳語彙、部品形訳置換語彙、〈空書〉のみの部品形訳語彙を示す。

### 2.1. 字体形訳語

〈動作〉を含まない字体形訳語彙は【井】、【小】、【千】<sup>12</sup>、【田】、【日】、【北1】<sup>13</sup>、【石1】<sup>13</sup>、【王】、〈動作〉を含む字体形訳語彙は【州】<sup>14</sup>、【品】、【北2】<sup>13</sup>、【川】、【人】、〈空書〉を含む字体形訳語彙は【公1】<sup>13、15</sup>、【行】<sup>16</sup>があげられる(表1)。

〈動作〉を含まない字体形訳語彙、〈動作〉を含む字体形訳語彙、〈空書〉を含む字体形訳語彙にみる〈手形〉は、〈1〉、〈2〉、〈3〉、〈4〉、〈オ〉、〈シ〉、〈ハ〉、〈メ〉、〈レ〉と多岐にわたる。そのうち両手が同

9 市田 (2005) は「classifiers (CL) とは名詞のクラスを標示する要素のことをさし、一般には類別詞または分類辞と訳される。手話言語においては図像的表現に用いられる手形のことをいい、『CL』あるいは『CL 手形』と呼ばれる。全体 CL、操作・道具 CL、手足 CL、拡張 CL などの種類がある。運動形態素と結合して CL 構文を形成する。」と述べている。Sandler & Lillo-Martin (2006) は「CL 手形と運動形態素の結合形式が、さらに手話空間内の位置関係と結びついたもの。手形、運動、位置の各要素が意味をもつ一音節多形態素構造。ただし、位置は無限の要素があるため非言語的であるとみなされており、厳密には形態素ではない。手話の語彙レベルおよび空間表現において図像性を利用する際に用いられる。凍結することにより固定語彙となる。手話言語の語彙の源泉である。」と述べている。

10 黒田 (2013) は「拡張記号モデル」という用語を用いている。しかし本稿では「拡張記号図式」と言い替えると共に、それに準じた「超拡張記号図式」という用語を用いる。

11 本稿では手話語彙の構成要素に〈空書〉を含める。

12 【千】は通常は地名「千葉」を指示対象とする単語として用いる。ただ、苗字「千本」を手話で表すとき、【千+本】と表す例もある。

13 【北】には2種類の表現型があるため、【北1】【北2】と区分する。【石】や【公】も【北】にならう。

14 【州】の起源字体は「州」ではなく、草書体「洲」であり、【州】にみる〈示指〉は草書体「洲」の「彡」を示しているものと考えられる。

15 【公1】は〈空書〉のとき「公」の2画目が脱落する場合もある。

16 【行】は通常は地名「行方[なめかた]」や《行事》を指示対象とする単語として用いる。



表 1 日本手話にみる形訳語彙

区分			米川	台湾	中国手語群
〈動作〉を含まない字体形訳語彙	【井】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=2342">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=2342</a>	●		共
	【小】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5079">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5079</a>	●	○ <sup>(b)</sup>	
	【千】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5725">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5725</a> <a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5730">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5730</a>	●		于
	【田】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=6508">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=6508</a>	●	●	●
	【日】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=6810">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=6810</a>	○ <sup>(a)</sup>		
	【北 1】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=7614">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=7614</a>		○ <sup>(c)</sup>	
	【石 1】	図 2 a			
	【石 2】	図 2 b			
	【石 3】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5658">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5658</a>			
	【石 4】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=2948">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=2948</a>			
	【石 5】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5653">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5653</a>			
	【石 6】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5655">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5655</a>			
	【王】		●	● <sup>(d)</sup>	●
	【山】				山 <sup>(i)</sup>
	【工】			工 <sup>(e)</sup>	工 <sup>(j)</sup>
【個】			个	个 <sup>(k)</sup>	
〈動作〉を含む字体形訳語彙	【州】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=4834">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=4834</a>			○ <sup>(l)</sup>
	【品】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=7203">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=7203</a>	●		●
	【北 2】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=7612">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=7612</a>			
	【川】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=7614">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=7614</a>	●	●	○ <sup>(m)</sup>
	【人】		●	●	● <sup>(n)</sup>
	【従】				从
〈空書〉を含む字体形訳語彙	【公 1】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3845">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3845</a>	●	○	○ <sup>(o)</sup>
	【行】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3998">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3998</a>			
	【毛】			○ <sup>(f)</sup>	
〈動作〉を含まない部品形訳語彙	【釜】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=2947">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=2947</a>			
	【中】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=6242">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=6242</a>	●	●	●
	【和歌山】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=8157">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=8157</a> <a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=8158">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=8158</a>			
	【不】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?md=syllabary&amp;dno=13">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?md=syllabary&amp;dno=13</a>			
	【公 2】				
	【西】				西 <sup>(p)</sup>
〈動作〉を含む部品形訳語彙	【血】			血 <sup>(g)</sup>	
	【介】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=2749">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=2749</a>		○	○ <sup>(q)</sup>
	【会】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=2755">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=2755</a>	●		
	【刑】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3493">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3493</a>	●		●
	【災】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=4202">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=4202</a>	●		
	【参】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=4316">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=4316</a>	●		
	【杉】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5510">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5510</a>	●		
	【兆】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=6297">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=6297</a>	●		
	【非】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=7122">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=7122</a>	●		●
	【物】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=7363">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=7363</a>			
〈空書〉を含む部品形訳語彙	【町】		●		
	【形】				●
	【局】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3355">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3355</a>	○		○ <sup>(r)</sup>
	【厚】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3876">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3876</a>	●		
	【甲】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3953">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3953</a>			
	【中央】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=6236">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=6236</a>			
	【中心】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=6253">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=6253</a>			
【斤】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=6298">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=6298</a>				

非手指部分を含む部品形訳語彙	【ソウル】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=1675">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=1675</a>			
	【芸】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3557">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3557</a> <a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=7149">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=7149</a>			
	【古】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3741">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3741</a>			古 <sup>(s)</sup>
	【市】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=4425">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=4425</a>			
	【中】			○ <sup>(h)</sup>	
部品形訳置換語彙	【下】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=2630">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=2630</a>			
	【火曜】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=2720">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=2720</a>			
	【釧路】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3456">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3456</a>			
	【行政】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3995">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3995</a>			
	【参考】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=4321">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=4321</a>			
	【上】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5208">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5208</a>			
	【杉並】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5512">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5512</a>			
	【入る】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=6842">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=6842</a>	●		
〈空書〉のみの部品形訳語彙	【千】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=43">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=43</a>		●	
	【司会】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=4376">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=4376</a>	●		
	【十分】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=4902">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=4902</a>			
	【間】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=7833">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=7833</a>	●		
部品義訳語彙	【滑川】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=4109">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=4109</a>			
	【予定】	<a href="https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=7906">https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=7906</a>	●		
(a) 両手の人差指と親指でそれぞれ [ ] を作り組み合わせる (米川 1979)	(b) 【小】 	(c) 【北】 	(d) 【王】 	(e) 【工】 	
(f) 【毛】 	(g) 【血】 	(h) 【中】 	(i) 【山】 	(j) 【工】 	
(k) 【个(個)】 	(l) 【州】 	(m) 【川】 	(n) 【人】 	(o) 【公】 	
(p) 【西】 	(q) 【介】 	(r) 【局】 	(s) 【古】 		
●: 日本手語にみる指漢字と同じもの, ○: 指示対象漢字は同じではあるものの, 表現型が異なるもの, 漢字表記: 表現型が同じであるものの, 指示対象漢字が異なるもの, (b)~(h)は Ann (1998) より転載し, (i)~(s)は 宮本 (2002) より転載した。					

表 2 【田】の変種および許容度

【田】変種と許容度	非利き手の接触面	利き手の接触面
【田 α】	掌	掌
?【田 β】	掌	甲
【田 γ】	甲	掌
*【田 δ】	甲	甲

じく手形)になるものは【田】、【井】、【北 1】、【北 2】、【行】、両手が異なるく手形)になるものは【日】、【小】、【千】、【公 1】になる。一方、利き手のみで表すものは【州】、【川】、【品】がある。

なお日本指文字の中には、【コ】、【ス】、【ニ】、【ノ】、【フ】、【ヘ】、【ミ】、【ム】、【リ】、【ル】、【レ】、【ン】のように、仮名の字体ないし部品を象ったものがある。さらに【IT】<sup>17</sup>や【JR】<sup>18</sup>のように、ラテン文字の『字体』や『部品』を象ったものもある。このように漢字だけでなく仮名やラテン文字を用いる書記日本語の影響が形訳語彙に及んでいることが窺われる。

## 2.2. 部品形訳語

〈動作〉を含まない部品形訳語彙は【釜】、【中】、【和歌山】、【不】、【公 2】<sup>19</sup>、〈動作〉を含む部品形訳語彙は【介】、【会】、【刑】、【災】、【参】、【杉】、【兆】、【非】、【物】、【町】、【形】、〈空書〉を含む部品形訳語彙は【局】、【厚】<sup>20</sup>、【甲】、【中央】<sup>21</sup>、【中心】<sup>22</sup>、【斤】があげられる。

〈動作〉を含まない部品形訳語彙、〈動作〉を含む部品形訳語彙、〈空書〉を含む部品形訳語彙にみる手形は、〈1〉、〈2〉、〈3〉、〈オ〉、〈シ〉、〈テ〉、〈ハ〉、〈メ〉、〈ヤ〉、〈レ〉、〈G〉<sup>23</sup>がみえる。そのうち両手が同じ手形になるものは【釜】、【公 2】、【会】、【刑】、【兆】、【非】、【厚】、【斤】、両手が異なるく手形)になるものは【中】、【介】、【災】、【杉】、【町】、【形】、【局】、【甲】、【中央】、【中心】になる。一方、利き手のみで表すものは【和歌山】、【不】、【参】、【物】がある。なお、指漢字のく手形)は、指自体を漢字の画に見立てる例と、手の尺側や橈側を漢字の画に見立てる例がある。形訳語彙の大半は前者であるものの、

後者の例として手形<テ>の尺側を部品「人」の画に見立てる【会】があげられる。

## 2.3. 非手指部分を含む部品形訳語

部品形訳語は手指のみで部品を象ったもののほかに、顔の一部を漢字の『部品』に見立てた非手指箇所を含む部品形訳語を含む。【ソウル】は口を「京」の部品「口」に見立て、〈3〉を「京」の部品「小」<sup>24</sup>に見立てることにより、「京」を指示対象とする部品形訳語を造語した後、地名「京城」<sup>25</sup>に意味拡張している。【和歌山】は口を「和歌山」にみる「歌」の部品「口」に見立て、〈ホ>の尺側を「可」の口を除いた部品に見立てることにより、「歌」を指示対象とする手話単語を造語した後、地名「和歌山」に意味拡張している。【芸術】は3語からなる複合語【芸+絵を描く+劇を演じる】であるものの、昭和時代初葉までは最初の語【芸】のみで《芸術》<sup>3</sup>を意味していた<sup>26</sup>。【藝】は口を「藝」の部品「云」に見立て、〈2〉を「++」にみる2本の縦画に見立てることにより、「藝」を指示対象とする部品形訳語を造語した後、《芸術》に意味拡張している。

## 2.4. 部品形訳置換語

部品形訳語彙には、部品を象ったく手形)をほかの手話単語のく手形)に置き換えたものもある。たとえば、【参考】は【考える】<sup>27</sup>の手形〈1〉を「参」の部品「彡」を象った〈3〉に置換したものである(く手形)の置換に伴い、〈動作〉も変化している)。「杉並」は【杉】を2回繰り返す表現をもって地名「杉並」を指示対象としている(反復動作に伴い、非利き手が脱落している)。「行政】は【監督する】<sup>28</sup>のく手形)が

17 <https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=463> [2022年11月閲覧]。【IT】は字体形訳語である。

18 <https://www.youtube.com/watch?v=IdxGjcBDOUc> [2022年11月閲覧]。【JR】は「JR」の「J」の部品形訳と指文字【r】を融合したく手形)に【電車】にみる〈動き〉を結合した複合語であるものと考えられる。

19 【公 2】は通常は《規範》や《公共》を指示対象とする語として用いる。

20 【厚】は通常は《厚生》を指示対象とする語として用いる。

21 【中】にみる利き手の手形〈1〉が〈空書〉になると【中央】になる。

22 【中央】に〈、〉が加わると、《中心》に意味拡張される。この【中心】は【中央】と【心】が複合した2音節・1韻脚とみなし得

る。このとき【心】にみる非利き手の手形〈1〉と利き手の〈空書:「心」の二画目〉は脱落する。

23 【中】にみる非利き手の手形〈G〉は、【千】にみる〈2〉や〈レ〉とは異なる。すなわち〈G〉に見立てた部品の画と〈2〉や〈レ〉に見立てた部品の画は異なる。

24 〈3〉は《両班の鬚鬚》を示すという民間語源もある。

25 「ソウル」は日本統治時代には「京城」と呼ばれていた。

26 【立命館】は【芸】と同じ表出形式ではあるものの、語源は異なる。

27 <https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3972> [2022年11月閲覧]

28 <https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3005> [2022年11月閲覧]

「行」の字体を象った〈シ〉に置換し、造語したものと考えられる。字体形訳語彙の節で紹介した【JR】も【電車】の〈手形〉を置換したという意味より、部品形訳置換語彙に含めることができる。

## 2.5. 〈空書〉のみの部品形訳語

〈空書〉を含む部品形訳語彙とは別に、〈空書〉のみの部品形訳語彙もある(図1)。「十分」は片手〈モ〉で「十」を空書する(図1a)。「司会」は片手〈モ〉で「司」から「一」と「口」を除いた部品を空書する(図1b)。「問」は両手〈モ〉で「問」の部品「門」の一部を空書する(図1c)。〈空書〉を含む部品形訳語彙にみる〈空書〉の〈手形〉は〈1〉であるのに対し、〈空書〉のみの部品形訳語彙にみる〈手形〉は〈モ〉という〈手形〉分布の偏在が窺える。〈空書〉を含む部品形訳語彙の一部や〈空書〉のみの部品形訳語彙は、空書から派生したものとも考えられる。

## 2.6. 形訳語にみる変種

日本手話語彙の中には、形訳語から変化し、現在では一見形訳語とはわからないものもある。たとえば、【石】の祖型は図2aに示すような字体形訳語【石1】であったと考えられる。一方、図2bに示すような【石2】は壁や地面に石がぶつかる様子を描写した類辞語である可能性もあるものの、【石1】に《固い石》というイメージを重ね合わせ、《壁に石をぶつけて固いことを示す》認識が加わることにより、表現型が変化した可能性もある。さらに【石1】の非利き手の〈手形〉が無標化して〈テ〉になったのが【石3】、同様に【石2】の非利き手の〈手形〉が無標化して〈テ〉になったのが【石4】であるものと考えられる。一方【石1】の利き手〈C〉が非利き手と同じ〈手形〉の〈テ〉ないし〈ホ〉に変化したのが【石5】である。【石6】は利き手の〈手形〉が〈ロ〉に変化し、【鉄】と同じ表現型になっている。このように、ある形訳語にみる〈手形〉が変化することによりさまざまな変種が生まれる派生事象が窺える。

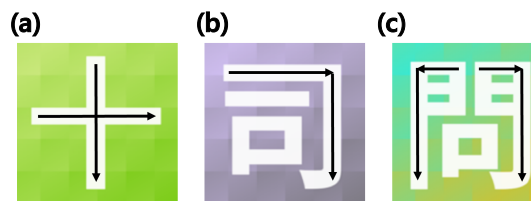


図1 空書主体の形訳語彙にみる空書部位

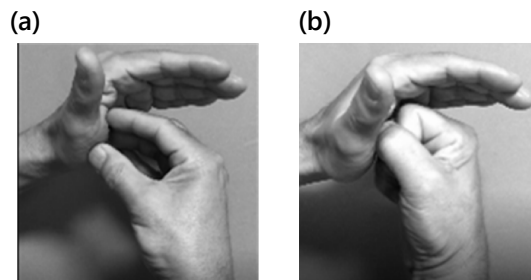


図2 【石】の祖型 (a)【石1】、(b)【石2】

字体形訳語【田】にみる変種はいずれも〈手形〉は〈3〉であるものの、両手の〈掌向〉の組み合わせより4種類の変種が考えられる(表2)。4種類の変種のうち、両手の〈掌〉が接触する【田α】が優勢型であり、非利き手の〈掌〉と利き手の〈甲〉が接触する【田β】や非利き手の〈甲〉と利き手の〈掌〉が接触する【田γ】も文脈により表出され得るものの、両手の〈甲〉が接触する【田δ】は非型<sup>29</sup>である。【田γ】は《田圃》として用いられることも少なくない<sup>30</sup>。

## 2.7. 形訳語における類型論

漢字文化圏に属する中国語群や台湾手語にも指漢字が相当数見受けられる。日本手話、台湾手語、中国手語群にみる形訳語彙を表1に示す。中国手語群や台湾手語にみる形訳語彙は、日本手話にみる指漢字と形式や指示対象が同じものもあれば、指示対象は同じではあるものの形式が異なるものもあるほか、中国手語群や台湾手語のみにある形訳語彙もあるなど、日本手話と中国手語群・台湾手語にみる【介】や【局】からも窺えるように、中国手語群や台湾手語にみる形訳語彙は〈空書〉を含む形訳語がほとんどないにも拘わらず、日本手話にみる形訳語彙

29 言語学にみる「非文」という用語に代わり、「非型」という用語を用いる。

30 このような変種分布の偏在は【井】にも観察されるものの【井γ】における意味拡張は観察されない。



は漢字の字体ないし部品の〈空書〉を含む形訳語が相当数ある。

中国手語群には字体形訳語彙【王】、【毛】、【于】があるものの、これらは日本手話では目にするのはあまりない。これは「毛」「于」「王」という字が中国人の姓に多くみられることと関係があるものと考えられる<sup>31</sup>。中国手語群には字体形訳語【工】があるものの、日本手話には「工」を指示対象とする字体形訳語はない。中国語では「工」<sup>32</sup>は《仕事》や《職人》を意味する基本語であり、日本語にみる「工」よりも日常生活における使用頻度が高いことより、字体形訳語【工】が造語される機運が高かったものとも考えられる。台湾手話には字体形訳語【血】があるが、日本手話にはない。これは中華料理や台湾料理にある《血豆腐》と関係があるのかもしれない。また日本手話や台湾手話にみる【井】は、中国手語群では「共」を指示対象とし、《共産党》を意味する単語として用いることもある。これは中国では「共」という字に使用頻度が極めて高いこととも無関係ではないだろう。すなわち日本、中国大陸諸地域、台湾にみる書記言語や社会文化の影響の下に、日本手話、台湾手話、中国手語群にみる形訳語彙の分布が多様化していることが窺われる。

### 3. 義訳語

#### 3.1. 人名や地名にみる義訳語

人名や地名に関係づけられた手話語彙には義訳語彙が多数みられる(パン 1978、米川 1979、張 2011 a、2011 b)。例えば現在、「浅野」という苗字は【浅い<sup>33</sup>+ノ】と表出する一方、「朝野」という苗字は

【起きる<sup>34</sup>+ノ】、「麻野」という苗字は【麻<sup>35</sup>+ノ】と表出する例が一般的である。すなわち「浅」、「朝」、「麻」という漢字それぞれの中心義に手話単語が関係づけられ、それぞれの漢字を指示対象とする手話単語として用いられている。

#### 3.2. 部品義訳語

【予定】は【予+計画】で表出する複合語であり、【予】は「予」の旧字体「豫」の部品『象』に関係づけられた【象】を借用したものである。このように漢字の部品の義訳語をもって、漢字の字体を指示対象とする例は部品義訳語と呼び得るものと考えられる<sup>36</sup>。部品義訳には地名「滑川」を【骨+川】と表出する例も挙げられる。この場合、「滑」を「滑」の部品『骨』の義訳語【骨】で表出している。

また膝に【メ】をあてて「ピザ」を表わす駄洒落もある。これは仮名「ピ」を『ヒ』と『』に分画したあと、「ヒザ」を【膝】に義訳し、【メ】を半濁点に見立てることにより【ピザ】を造語している。このような仮名を対象とした例も部品義訳に含むことができる。

### 4. 音訳語

苗字「上原」を日本手話で表出するときは、【上+原<sup>37</sup>】よりも、[はら]という共通する読みを持つ「腹」の義訳語【腹】を借用した【上+腹<sup>38</sup>】のほうが広く用いられている。また苗字「佐藤」は[さとう]という読みを持つ「砂糖」の義訳語【甘い】<sup>39</sup>を借用する例が定着している。一方[ローソン(=Lawson)]を[ロー]と[ソン]に分節し、それぞれの音訳語【聾】と【損】を組み合わせると【聾<sup>40</sup>+損<sup>41</sup>】と表出する例もあ

31 日本手話に字体形訳語【田】、部品形訳語【中】や音訳語【佐藤】があるのも、日本人の苗字に「田中」や「佐藤」が多いことと関係がある可能性が窺われる。

32 <https://cjc.weblio.jp/content/%E5%B7%A5> [2022年11月閲覧]

33 <https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5761> [2022年11月閲覧]

34 <https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=6307> [2022年11月閲覧]

35 <https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=7664> [2022年11月閲覧]

36 『象』を部品として含む漢字のうち、使用頻度の高いものとしては「豫」と「像」があげられるものの、「豫」を指示対象とする手

話単語のほうが「豫定」「豫算」「豫行」など需要性が高かった可能性も考えられる。

37 <https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5245> [2022年11月閲覧]

38 <https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3696> [2022年11月閲覧]

39 <https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=4170> [2022年11月閲覧]

40 <https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=1255> [2022年11月閲覧]

41 <https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=5944> [2022年11月閲覧]

る。このように表語音節語は漢字だけでなく仮名を指示対象とするものもある。

なお江戸時代中葉に上演された『山椒大夫五人嬢』の台本には、唾娘「およつ」と、およつの聴姉であり手話通訳を務める「おさん」が登場し、およつが「目出度い」を【目+出る<sup>42</sup>】と表出する行がある(竹田 1721、乙竹 1929)。すなわち江戸時代中葉の古日本手話ないし古手指日本語には音訳語があり、書記日本語と古日本手話の言語接触は江戸時代中葉に遡及し得ることが窺われる。また明治時代の東京聾啞学校唾生部においても漢字の読みに関する指導がおこなわれており(小西 1888、1889)、日本手話と漢字表記や仮名表記の相互作用が日常的に起きていた可能性が窺われる。

## 5. 超拡張記号図式

Langacker (2008) は認知構文にみる構造を分析するにあたり、音韻極と意味極の2項関係を包摂する記号空間を示す図式(図 3a)を用いてきた<sup>43</sup>。しかし黒田 (2013) は書記日本語にみるルビや当て字のような音素文字文化圏にはみられない言語事象を分析するにあたり、音韻極と意味極に書記極を加えた拡張記号図式<sup>44</sup>(図 3b)を設定し、音韻極、書記極、意味極の3項関係にみる動態の様相を図式化した。石野 (2019) も拡張記号図式を援用し、書記日本語における漢字と仮名の動態的相互作用を考察している。

本稿は拡張記号図式に倣って、音韻極、書記極、意味極に手話極を加えた超拡張記号図式(図 3c)を設定し、音韻極、書記極、手話極と意味極の間における4項関係を図式化し、形訳語、義訳語、音訳語の造語機序を詳らかにする。

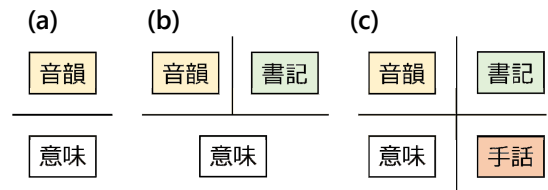


図3 (a) 記号図式 (Langacker 1980)、(b) 拡張記号図式 (黒田 2013)、(c) 超拡張記号図式  
黄は音韻極、緑は書記極、橙は手話極、無色は意味極を示す。

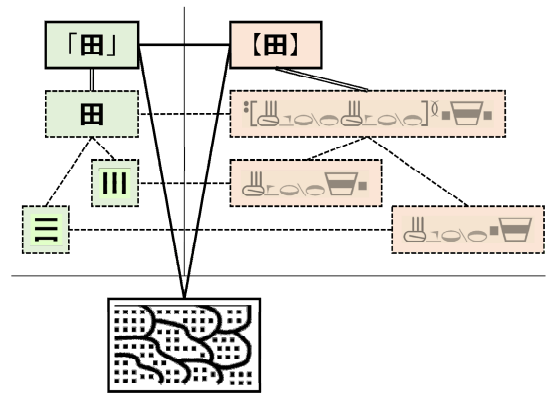


図4 字体形訳語【田】の形訳機序

緑は書記極、橙は手話極、無色は意味極を示す。  
実線は意味極、点線は非意味極を示す。

### 5.1. 形訳機序

字体形訳語【田】の造語機序を超拡張記号図式で展開したものを図4に示す。なお【田】の造語機序に音韻極は関与していないものとみなし、図4は書記極、手話極、意味極のみを示す3重記号図式で描写した。漢字「田」は意味極《田》と関係づけられることにより、有意味書記極として位置づけられる。有意味書記極「田」が意味極《田》と切り離される(=図形化)ことにより、非意味書記極『田』になり、非意味書記極『田』は非意味書記極『Ⅲ』と『三』に分画され

42 <https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=3352> [2022年11月閲覧]

43 音韻極と意味極のみで構築された図式は書記言語は文字媒体を介した音声言語の二次的産物にすぎないという欧米言語学に色濃く窺える言説が反映されたものとみなすこともできる。

44 黒田 (2013) は「音声と意味からなる狭義の言語だけでなく、文字なども含めた広義の言語(あるいは絵なども含めたより広い記号系全般)とは何かを人間の認知能力という観点から

学際的に研究するための新たな研究の場を提供する。言語使用者の知識状態の変化は、ネットワークの拡張として記述することができる。静的・動的な知識状態の記述に留まらず、使用者の個人的な知識状態の変化も捉えることのできる動的なネットワークモデルであると言える。意味の希薄化やリンクの消失などによって、両者が個別に記号関係を結んでいるという図式で示すことができる。」と述べている。

る。非意味書記極『Ⅲ』や『三』はそれぞれ手話極〈3〉と関係づけられ、さらに結合されて非意味手話極〈田〉になる。この非意味手話極〈田〉が意味極《田》と関係づけられることにより、手話極【田】として位置づけられる。最終的に有意味書記極「田」と有意味手話極【田】が関係づけられ、書記極、手話極、意味極の3項関係が成立する。

また部品形訳語【庁】の造語機序を超拡張記号図式で展開したものを図5に示す。有意味書記極「庁」が図形化により非意味書記極『庁』を経て『广』と『丁』に分画される。このとき、『庁』と『丁』は、全体と部分という換喩関係で関係づけられる。『丁』は非意味書記極『一』と『J』に分画され、それぞれが非意味手話極〈一〉と〈J〉に関係づけられ、それらが結合されて非意味手話極〈丁〉になる。非意味書記極『庁』と『丁』の換喩関係が非意味手話極〈庁〉と〈丁〉の換喩関係に写像され、非意味書記極『庁』が非意味手話極〈庁〉と関係づけられる。続いて非意味手話極〈庁〉は意味極《庁》と関係づけられることにより、意味極《庁》、書記極「庁」、手話極【庁】の3項関係が成立する。

続いて部品形訳語【町】の造語機序を超拡張記号図式で展開したものを図6に示す。「町」の場合も「庁」と同じように図形化、非意味書記極の分画、非意味書記極と非意味手話極の関係づけを経て有意味手話極【町】が造語される。

ただ非意味手話極〈3〉〈三〉〈一〉〈J〉の結合においては、(1)〈3〉〈三〉〈一〉〈J〉の4極すべてを結合する、(2)〈3〉〈三〉〈J〉の3極のみを結合する、(3)〈三〉〈J〉の2極のみを結合する、の3形式が考えられるため、【町】は3種類の変種が造語されることになる。どの変種が表出されるかは日本手話話者の地域性や年代性に加えて話者の個性や日本手話談話の文脈が加わり、ad hoc 的に表出されるものと考えられる。ただ(1)(2)(3)いずれの形式も〈三〉〈J〉の2極を含んでいることより、〈三〉〈J〉の2極が換喩関係の軸をなし、〈3〉は緩やかな換喩関係、〈一〉はさらに弱い換喩関係に留まるというように、4極それぞれの換喩関係(=全体と部分の関係づけ)も多岐にわたることが窺われる。

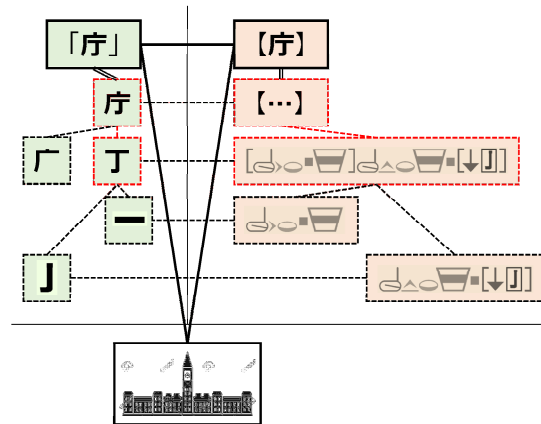


図5 部品形訳語【庁】の形訳機序

緑は書記極、橙は手話極、無色は意味極を示す。実線は意味極、点線は非意味極を示す。赤は換喩関係を示す。

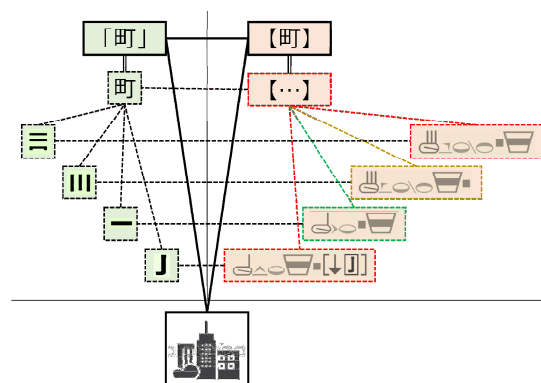


図6 部品形訳語【町】の形訳機序

緑は書記極、橙は手話極、無色は意味極を示す。実線は意味極、点線は非意味極を示す。赤は換喩関係を示す。

このような漢字と形訳語の関係づけは、非意味書記極と非意味手話極の関係づけであり、言語記号のみを対象とする言語学的視座に留まらず、非言語記号をも対象とする記号論的視座に則って考察をはかることが望まれる。ここに記号論的視座に基づいた超拡張記号図式を用いて形訳機序の可視化をはかる意義があるものと考えられる。

## 5.2. 義訳機序

義訳語【朝】の造語機序を超拡張記号図式で展開したものを図7に示す。有意味書記極「朝」は意

味極の《起きる》と《夜明け》に関係づけられ、それぞれが有意味手話極【起きる】<sup>34</sup>と【夜明け】<sup>45</sup>に関係づけられる。さらに手話極【起きる】と【夜明け】が有意味書記極「朝」と対応づけられることにより、有意味書記極「朝」、有意味手話極【起きる】、意味極《起きる》の間における3項関係が成立する運びになる。

義訳語彙においては、一字の漢字(=有意味書記極)に複数の手話語彙(=有意味手話極群)が関係づけられる例が少なくない。このような事象は日本語語彙において、漢字にさまざまな音読みや訓読みが関係づけられることにより、語彙形態ネットワーク(加藤 2006, 2021)が形成される機序とよく似ている。すなわち有意味書記極(=漢字)や有意味手話極を結束子とし、書記極、手話極、意味極を包摂する語彙形態網も形成されていることが窺われる。

続いて部品義訳語【豫】の造語機序を超拡張記号図式で展開したものを図8に示す(図8では有意味書記極「豫」が非意味書記極に変換される図形化過程は表示していない)。有意味書記極「豫」が有意味書記極「予」と「象」に分画され、「豫」と「象」の換喩関係が構築されるとともに、有意味書記極「象」のみが有意味手話極【象】関係づけられ、有意味書記極「豫」、有意味手話極【象】、意味極《豫》の3項関係が成立する。

### 5.3. 音訳機序

「原」を指示対象とする【腹】の造語機序を超拡張記号図式で展開したものを図9に示す(図9では図を見やすくするために、音韻極と手話極の対応づけを示す線や書記極と意味極の対応づけを示す線は表示しない)。

有意味書記極「原」と「腹」は共に音韻極【はら】と関係づけられている。「原」は有意味手話極【野原】と関係づけられているものの、関係づけの度合いは弱いものと考えられる。一方「腹」は有意味手話極【腹】と関係づけられており、その度合いは強いものと考えられる。

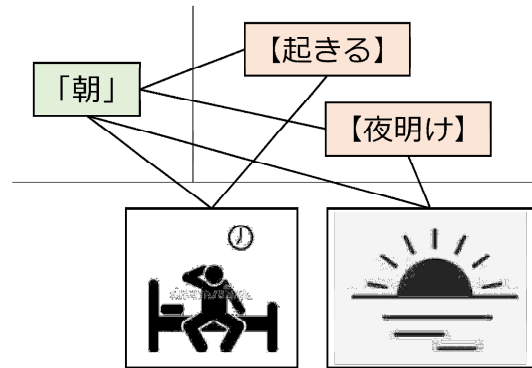


図7 義訳語【朝】の義訳機序

緑は書記極、橙は手話極、無色は意味極を示す。

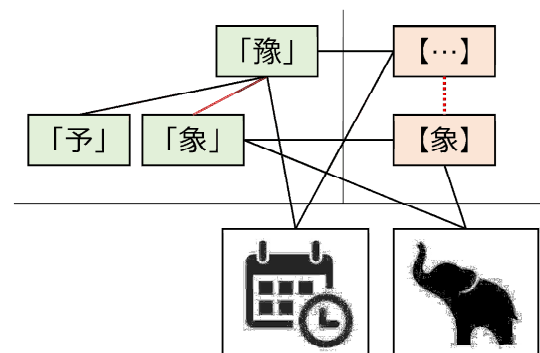


図8 部品義訳語【予】の義訳機序

緑は書記極、橙は手話極、無色は意味極を示す。赤は換喩関係を示す。

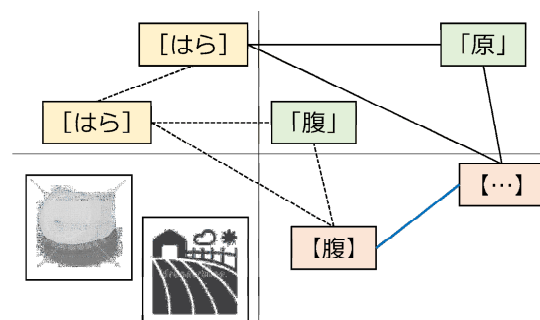


図9 表語音節語【腹】の音訳機序

黄は音韻極、緑は書記極、橙は手話極、無色は意味極を示す。実線は有意味極、点線は非意味極を示す。青は派生を示す。

45 <https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=6813> [2022年11月閲覧]



音韻極〔はら〕の同一関係が有意味手話極群に写像され、【原】の代わりに【腹】を用いる仮借機序(=音訳機序)が構築されるものと考えられる。このとき、有意味手話極【腹】と意味極《腹》の関係づけは希薄化し、【腹】の指示対象は意味極《腹》から音韻極〔はら〕に変化し、【腹】は音韻〔はら〕を指示対象とする複音節語<sup>46</sup>として機能しているものと考えられる。このような音訳機序は、日本語にみる当て字とよく似ており、日本語語彙体系にみるさまざまな事象が手話語彙の拡充にも影響を及ぼしていることが窺われる。手話語彙自体は手話媒体を介した言語であり狭義的には文字ではないものの、中心義を持つ語が複音節を示す記号として用いられている点において、広義的に表語音節語<sup>47</sup>と考えられる。

続いて【ローソン(=聾+損)】の造語機序を超拡張記号図式で展開したものを図10に示す。音韻極〔ローソン〕が〔ロー〕と〔ソン〕に分節され、それぞれが音訳過程を経て有意味手話極【聾】と【損】に関係づけられる。音訳語【聾】と【損】が統合され、音韻極〔ローソン〕と意味極《ローソン》と関係づけられる。このとき、有意味手話極【聾】と意味極《聾》、有意味手話極【損】と意味極《損》の関係づけは希薄化し、【聾】は音韻〔ロー〕、【損】は〔ソン〕を指示対象とする複音節語<sup>48</sup>として機能しているものと見なし得る。

しかし、手話話者の知識状況により、【損】と《損》の関係づけが前景化すると共に、【聾】と《聾》の関係づけも前景化され、【聾+損】が《聾者は損》として解釈される場合もある。その結果、【損】が不適切な語として退けられ、肯定的な中心義を持つ【尊】に差し替えられて【聾+尊】が新たに造語された例もある。

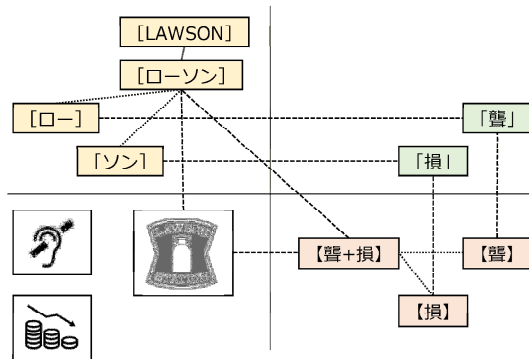


図10 表語音節語【聾+損】の音訳機序  
黄は音韻極、緑は書記極、橙は手話極、無色は意味極を示す。

このような例は音訳語彙においても語本来の意味が完全に消えることはなく、環境に応じて本来の中心義との関係づけ(=表語性)が前景化することを意味しており、表語音節語において表語性と表音性の関係は動的なものであることが窺われる。表語音節語にも漢字にみる仮借字<sup>49</sup>と通仮字に該当するものがあり、文脈に応じて揺らぎを見せるものとも考えられる。とりわけ【損】のように否定的な語義が伴う場合は、通仮字的用法になる傾向があるものと考えられる。

#### 5.4. 形訳・義訳・音訳の重層性

地名「朝霞市」は【起きる+カ+シ】<sup>50</sup>と表出される。しかし【起きる+カ+シ】にみる【起きる】は《起きる/朝》という語義が前景化され、有意味書記極「朝」を指示対象としているわけではなく、非意味手話極【起きる】が『朝』という字自体を指示対象としてい

46 なお漢字は通常は一字一音節という形式を示すものの、一字で複音節を示す例も知られている。Kennedy (1937) は中国語が単音節言語であるという考えを否定し、Boodberg (1940) も漢字が表語文字であることを強く主張している。周 (1961) や曾 (1979) はローマ字表記法が漢字を複音節の字に変えたと述べている。De Francis (1977) は「漢字は表意文字である」や「中国語は単音節言語である」という見解を否定している。《図書館》を意味する3音節文字「圖」や、《社会主義》を意味する4音節文字「義」が知られている。ただ阿辻 (2013) は「『圖』は一字一音節の原則から外れるので...漢字ではなく記号の範疇に入る」と述べている。

47 表音的用法を持つ表語文字には表語音節文字と表語音素文字がある。表語音節文字は現在の漢字が代表的な例として知られているものの、マヤ文字 (八杉 2009) やアステカ文字 (八

杉 2009) にもみられる。表語音素文字はエジプトの聖刻文字 (矢崎 2016) やメソポタミアの楔型文字 (箕原 2020) などにみられる。

48 「ロー」には長音、「ソン」には撥音が含まれるため、本来は「複拍語」と言うべきではあるものの、便宜的に「複音節語」とする。  
49 松江 (2021:65) は「仮借字は二漢字種類に分けられる。元々の表意字としての用法を完全に失った結果、表音的に表していた語との結びつきのみが定着したものと、その字が本来的に表していた語との関係を維持したまま、いわば臨時的に表音的用法に用いるものである。後者をとくに『通仮字』と呼び、狭義の仮借字から区別する立場もある。」と述べている。

50 <https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=6309> [2022年11月閲覧]

る<sup>51</sup>。すなわち義訳機序を経て非意味手話極【起きる】と非意味書記極『朝』が関係づけられるという事象であり、このような関係づけは言語学的視座では困難であり、文字論と関連づけた記号論に則ってはじめて図式化が可能になるものと考えられる。

また「あさ」という平仮名表記の名前の人が自己紹介をするとき【起きる】を用いた場合、【起きる】の指示対象は音韻極[あさ]である。すなわち非意味手話極【起きる】と音韻極[あさ]が関係づけられるという事象であり、非言語記号を扱う記号論に立脚してはじめて図式化が可能になるものと考えられる。

有意味手話極と有意味書記極の関係づけを ortho-、非意味手話極と非意味書記極との関係づけを meta-、非意味手話極と音韻極との関係づけを para-とし、それぞれの関係づけを図 11 に示す。図 11 は文脈に応じて、手話極【起きる】が有意味手話極(=言語記号)ないし非意味手話極(=非言語記号)に変化し、有意味極ないし非意味極に関係づけられるという記号論的動態性を図式化している。このような手話単語【朝】が日本語「朝」を指示対象とするほか、漢字「朝」の字体、さらには音韻[あさ]をも指示対象とし得る多指示対象網は動態的多義ネットワーク (Zipf 2013、寺西 2021) と高い親和性を示す。

## 6. 圏論

超拡張記号図式を用いて、形訳、義訳、音訳の機序が意味極、音韻極、書記極、手話極のうち3極からなる3項関係により構築されていることを図式化した。しかし、形訳、義訳、音訳の機序にみさまざまな3

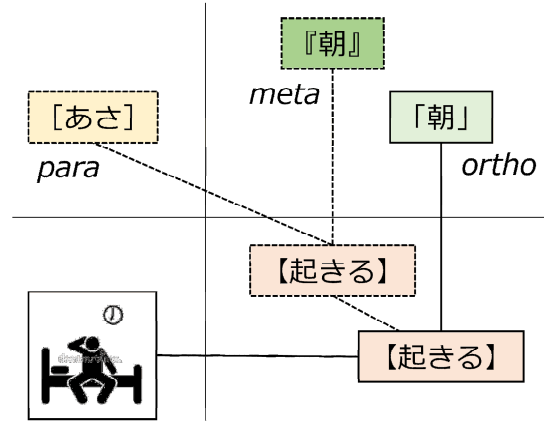


図 11 【起きる】の指示対象の拡張

黄は音韻極、緑は書記極、橙は手話極、無色は意味極を示す。実線は有意味極、点線は非意味極を示す。

項関係の間にはどのような関係づけがみられるのかについては不明であったため、圏論を援用し考察をはかることにした。

圏とは対象と対象の方向づけられた関係づけ(矢)である射<sup>52</sup>( $\rightarrow$ )の集合である。関手は圏から圏への矢( $\rightarrow$ )であり、この概念を図 12 a に示す<sup>53</sup>。関手の具体的な例として、西郷 (2021) は量の圏と交通圏の間にみる関手を紹介している (図 12 b)<sup>54</sup>。自然変換は関手から関手への矢( $\Rightarrow$ )であり、この概念を図 12 c に示す<sup>55</sup>。西郷・田口 (2019:124) は自然変換に関し、「関手は、通常『一つに決まるものではない』…ある『関手』から別な『関手』への『自然変換』を考えることも重要である。…異なる『理解』や『翻訳』、あるいは『モデル化』『理論』といったものの間を橋渡しすることもまた、自然変換の構築であると

51 【起きる】という手話を通して認識した『朝』という字に「朝」が示す語義をどの程度認識するかは会話の相手次第である。

52 圏論における射には「恒等射と合成射を含む」「射に定義された合成に関する演算が結合律と単位律を満たしている」という条件が課せられる。

53 西郷・田口 (2019:121) は「定義(関手)圏 C から圏 D への関手 F とは、圏 C の任意の対象および射に対して圏 D の対象および射をそれぞれただ一つ定める対応づけであって、 $\text{dom}(f)=\text{cod}(g)$ となる圏 C の任意の射 f, g に対して、 $F(g \circ f)=F(g) \circ F(f)$ であり、圏 C の任意の対象 A に対し、 $F(\text{id}_A)=\text{id}_{F(A)}$ をみたすものをいう。」と述べている (図 12 a)。

54 西郷 (2021) は「モルというのは米原駅みたいなものですよ。米原駅というのは…『乗り換えるための駅』です。この米原駅のとこがモルに似ているのか。名古屋と京都はもちろん重要な都市ですし、長浜もまたそれに劣らず『重要』な都市ですね。

この3つをつなげ、うまく乗換可能にするというのが米原駅の役割です。モルも同じです。モルを考えることに何の意味があるのかというと、体積(リットル)と、原子の個数(個)と、質量(グラム)をつなげる…これは先ほどの、単位あたり量を矢印とした「量の圏」に似ています。日常語でも「交通圏」と言いますが、『行き方』を矢印、『行き方をつなげる』を合成、『動かないという《行き方》』を恒等射とみなせば、交通ネットワークも『圏』として考えられます。」と述べている (図 12 b)。

55 西郷・田口 (2019:125) は「定義(自然変換)F, G を圏 C から圏 D への関手とする。圏 C の任意の対象 X に対し、それぞれただ一つ  $F(X)$  から  $G(X)$  の射  $t_x$  を定める対応づけ  $t$  が F から G への自然変換であるとは、圏 C の任意の対象 X, Y および X から Y への任意の射 f に対して、 $G(f) \circ t_x = t_y \circ F(f)$  が成り立つことを言う。」と述べている (図 12 c)。

いえる。」と述べている。西郷・田口 (2019: 127) は「楽譜に書き出すことも、楽譜を用いて演奏することも、共に『関手』の構築と考えることが可能である。…この『関手』を包括的な仕方と言い換えるとすれば、それは何であろうか？ それもまたある種の『現れ』ではないか。関手とは、まさに圏が圏に現れる、その『現れ』である。そして、その『現れの変化(動き・プロセス)』が自然変換ということになる。このようにして、関手を対象とし、自然変換を射とする圏を考えることができる。これを関手圏とよんでいる。」と述べている。すなわち、射、圏、関手、自然変換、関手圏という枠組みにより圏論が構築される。

西郷・能美 (2019) は圏論を援用した分析における意義に関し、「自然同値の概念により、表現、モデル、理論などの本質的な同じさを捉えられる。自然同値な骨組みを保ちつつの変形であり、不定性、自由度などに対応する。」と述べている。圏論の枠組みを用いた諸事象の分析例は、布山・西郷 (2018) による言語的譬喩、松下 (2018) による音階と旋律の関係、中村 (2021) による縄文時代の社会事象など学際性が際立つものが見受けられる。

### 6.1. 超拡張記号図式と圏

図 13 に漢字とルビがなす3項関係から義訳機序にみる3項関係への変換を圏論的に図式化したものを示す。図 13 の圏  $\mathcal{A}$  では漢字とルビがなす3項関係が次のような関係づけにより構築される。まず意味極と音韻極の関係づけ(射 a) がはかられ、そのつぎに意味極と書記極の関係づけ(射 b) がはかられる。意味極と音韻極および書記極が関係づけられることにより、新たに音韻極と書記極が関係づけられ(射 c)、意味極、音韻極、書記極の関係づけ(射 a, b, c) が構築される。ここにおいて、日本語の意味の認知が意味極と音韻極の関係づけ(射 a) を意味し、漢字の意味の認知が意味極と書記極の関係づけ(射 b) を意味する。すなわちルビに該当する日本語の意味と漢字の意味が個別に認知された後、日本語の意味と漢字の意味が同じ(もしくは概念的に近い)ということより日本語と漢字が対応づけられ、漢字とルビ、さらに意味が関連づけられるという機序が一つの圏  $\mathcal{A}$  をなし、そこに漢字とルビの対応づけに関する

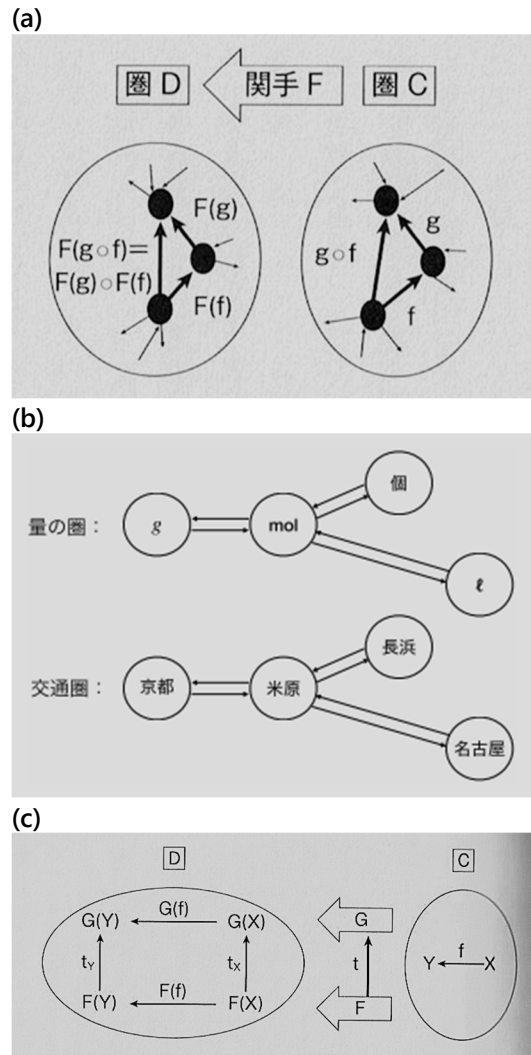


図 12 (a) 関手の概念図 西郷・田口 (2019: 図 8) を転載、(b)、量の圏と交通券の関手 西郷 (2021: 図 4) を転載(註 53 参照)、(c) 自然変換の概念図 西郷・田口 (2019: 図 9) を転載。

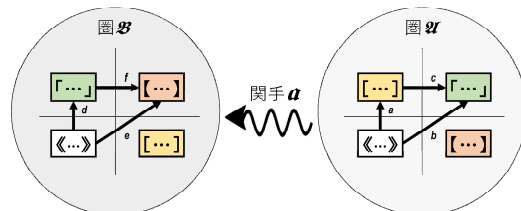


図 13 ルビ機序から義訳機序への関手 黄は音韻極、緑は書記極、橙は手話極、無色は意味極を示す。

認知過程が包摂されていることが窺われる。

一方、圏  $\mathcal{B}$  は【朝】と「朝」の関係にみる義訳機序



(図7)にみる3項関係を示している。まず意味極と書記極の関係づけ(射 d)がはかられ、その次に意味極と手話極の関係づけ(射 e)がはかられる。意味極と書記極および手話極が関係づけられることにより、新たに書記極と手話極が関係づけられ(射 f)、意味極、書記極、手話極の関係づけ(射 d、e、f)が構築される。圏 $\mathfrak{A}$ にみる意味極、音韻極、書記極の関係づけと、圏 $\mathfrak{B}$ にみる意味極、書記極、手話極の関係づけは同じ図式を示し、圏 $\mathfrak{A}$ から圏 $\mathfrak{B}$ への関手 $\alpha$ が構築される。関手 $\alpha$ では音韻極のかわりに手話極を3項関係に取り込む変換がおこなわれている。これは手話の意味と日本語の意味が個別に認知された後、手話の意味と日本語の意味が概念的に同じであるか近いということより手話と日本語が対応づけられ、手話と日本語、さらに意味が関連づけられるという機序が一つの圏 $\mathfrak{B}$ をなし、そこには手話と日本語の対応づけに関する認知過程が包摂されることを意味している。すなわちルビの機序(圏 $\mathfrak{A}$ )と義訳機序(圏 $\mathfrak{B}$ )は圏同士の関係づけ(関手 $\alpha$ )を通じた圏論的同じさを示すことになる。

次に図14に義訳機序から音訳機序への変換を図式化したものを示す。圏 $\mathfrak{C}$ では[はら]と[原]の関係にみる音訳機序(図9)にみる書記極、音韻極、手話極の3項関係が次のような関係づけにより構築される。まず[はら]と[原]の関係にみる音訳機序(図9)に援用すると、次のような関係づけを観察することができる。まず書記極と音韻極の関係づけ(射 g)がはかられ、その次に書記極と手話極の関係づけ(射 h)がはかられる。意味極と書記極および手話極が関係づけられることにより、新たに書記極と手話極が関係づけられ(射 i)、書記極、音韻極、手話極の関係づけ(射 g、h、i)が構成される。圏 $\mathfrak{B}$ にみる意味極、書記極、手話極の関係づけと、圏 $\mathfrak{C}$ にみる書記極、音韻極、手話極の関係づけは同じ図式を示し、圏 $\mathfrak{B}$ から圏 $\mathfrak{C}$ への関手 $\beta$ が構築される。関手 $\beta$ では意味極のかわりに音韻極を3項関係に取り込む変換がおこなわれている。すなわち義訳機序と音訳機序は関手を通じた圏論的同じさを示す。なお圏 $\mathfrak{C}$ には意味極が関係づけられないことより、非意味極を扱うことになり、ここに言語記号以外の非言語記号を扱う記号論的視座の意義が窺われる。

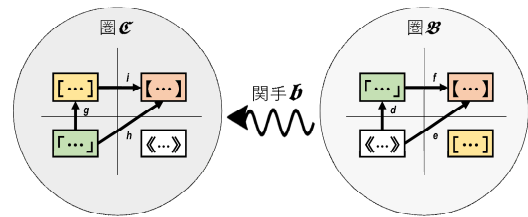


図14 義訳機序から音訳機序への関手  
黄は音韻極、緑は書記極、橙は手話極、無色は意味極を示す。

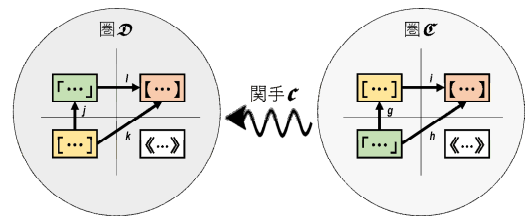


図15 音訳機序から異なる音訳機序への関手  
黄は音韻極、緑は書記極、橙は手話極、無色は意味極を示す。

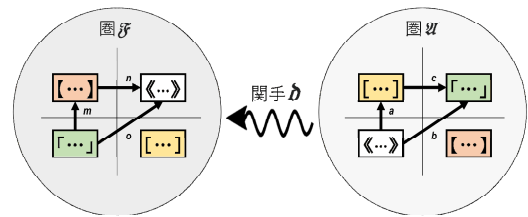


図16 ルビ機序から形訳機序への関手  
黄は音韻極、緑は書記極、橙は手話極、無色は意味極を示す。

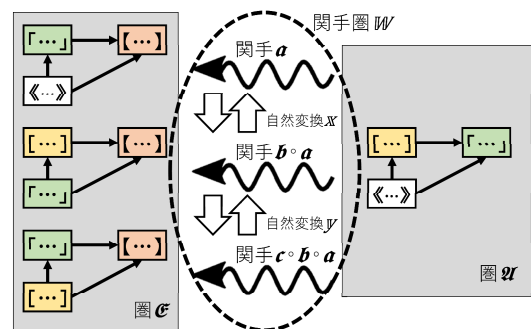


図17 ルビ機序、義訳機序、音訳機序、形訳機序の関手圏

薄黄は音韻極、薄緑は書記極、橙は手話極、無色は意味極を示す。



続いて図 15 に音訳機序同士の変換を示す。圏Dでは[ロー+ソソ]と【聾+損】の関係にみる音訳機序(図 10)に援用すると、次のような関係づけを観察することができる。まず音韻極と書記極の関係づけ(射 j)がはかられ、その次に音韻極と手話極の関係づけ(射 k)がはかられる。音韻極と書記極および手話極が関係づけられることにより、新たに書記極と手話極が関係づけられ(射 l)、音韻極、書記極、手話極の関係づけ(射 j, k, l)が構成される。圏Cにみる書記極、音韻極、手話極の関係づけと、圏Dにみる音韻極、書記極、手話極の関係づけは同じ図式を示す。ここに圏Cから圏Dへの関手cが構成される。関手cでは3項関係を構築する極の組み合わせの変化はないものの、3極の関係づけ(射の向き)の変換がおこなわれている。すなわち音訳機序にみる仮借【腹】と音訳機序にみる【聾+損】は関手を通じた圏論的同じさを示すことが窺われる。圏Dも意味極が関係づけられないため、圏Cと同じように、【聾】と【損】の意味に制約されず、[ロー]と【聾】の関係づけや[ソソ]と【損】の関係づけに変換する関手を構築することができるものと考えられる。

一方、図 16 に漢字とルビがなす3項関係から形訳機序にみる3項関係への変換を圏論的に図式化したものを示す。圏gでは【田】にみる形訳機序(図4)が次のような関係づけにより構築される。まず書記極と手話極の関係づけ(射 m)がはかられ、その次に書記極と意味極の関係づけ(射 n)がはかられる。書記極と手話極および意味極が関係づけられることにより、新たに手話極と意味極が関係づけられ(射 o)、書記極、手話極、意味極の関係づけ(射 m, n, o)が構成される。圏uにみる意味極、書記極、手話極の関係づけと、圏gにみる書記極、手話極、意味極の関係づけは同じ図式を示す。ここに圏uから圏gへの関手bが構成される。ただ関手bでは手話極を含む3項関係を新たに構築するという点において関手aと共通する。

## 6.2. 超拡張記号図式と関手圏

図 17 に圏uと圏C、自然変換xと自然変換y、関手圏Wを示す。圏Cは圏B、圏C、圏Dを含む圏であり、圏B、圏C、圏Dは、それぞれ意味極、書記極、音韻極

を起点極としているものの、すべて手話極を目標極としている。圏uから圏Cへの関手には関手a、関手b $\circ$ a、関手c $\circ$ b $\circ$ aが関係づけられる。このとき、関手aと関手b $\circ$ aの間には自然変換xとその逆変換、関手b $\circ$ aと関手c $\circ$ b $\circ$ aの間には自然変換yとその逆変換が存在する。このような関手を含む関手圏Wが存在する。このような関手圏はルビにみる機序から自然変換を繰り返して義訳やささまざまな仮借や音訳に基づいた造語にみる機序が構築されることを示している。

超拡張記号図式では各領域にみる極に焦点をあてており、それぞれの極の対応づけは付随的なものであるのに対し、圏論ではそれぞれの極の対応づけ自体に焦点をあて、それぞれの対応づけがどのように変換されていくのかを観察する。圏論的視座の下では、指漢字や義訳語自体を焦点化するのではなく、漢字と指漢字の関係、日本語語彙と日本手話語彙の関係づけを焦点化するものであり、超拡張記号図式と圏論の相補関係が窺える。すなわち超拡張記号図式による分析では必ずしも十分には可視化されない形訳、義訳、音訳の造語機序における異同が圏論にみる関手圏により可視化されることが窺われる。ここに日本手話にみる指漢字や表語音節語の造語機序の分析にあたり、超拡張記号図式に加えて圏論を援用する意義がある。

## 7. 文字性と図形性

文字は線により構築される象徴記号かつ言語記号である。しかし形訳機序には、書記極、手話極、意味極の間における変換のほかに、有意味書記極から非意味書記極への変換(=非言語記号化・図形化)や、非意味手話極の結合および有意味手話極への変換(=言語記号化・非図形化)がみられる。

有意味書記極から非意味書記極への変換のためには、漢字の図形的認知が必要であり、このような認知は非漢字文化圏(=音素文字文化圏)の人による漢字の模写(Benjamin 1700)にみることができ。しかし漢字文化圏の人による漢字の図形的認知に関し、澤(2020:269)は「記号の対象指示能力が減退し、形が優勢になる...通常はく(しるし)である文字の形を凝視すること。これが文字の〈画素〉への解

体を可能にする。」と述べており、このような図形的認知は漢字を介したロゴデザイン工程(周・木本 2007)にも窺われる。形訳機序にみる漢字の図形的認知と画素への解体はロゴデザイン工程との類似性を示すことが窺われる。

また Electroharmonix<sup>56</sup>という書記日本語使用者には片仮名のように見えてしまうラテン文字のフォントがある。このようなフォントは、音素文字にも図形性があり、Electroharmonixのようなフォントにみる図形性が、片仮名の図形性との類似性を示すことにより、書記日本語使用者における混乱を引き起こすものと考えられる。すなわち、漢字のような表語文字に留まらず、音素文字や音節文字においても、文字性と図形性は重層的かつ動的なものであることが窺われる。

Wei & Hua (2019) は、ラテン文字のような漢字とは異なる文字や記号にみるさまざまな構成要素が漢字の部品として取り込まれるだけでなく、漢字の字体ないし部品が異なる文字や記号の構成要素として用いられ、新しい記号群を生み出し、電子環境に広まっていく様相を tranScripting と名づけた。形訳、義訳、音訳の機序を経た指漢字や表語音節語彙が日本手話話者や手話通訳者、手話学習者の間に広まっていく様相は、まさに日本手話にみる tranScripting であり、日本手話が閉じた自律的体系ではなく、外部に開かれ、外部とさまざまな相互作用を経ながらもゆるぎなき自律性を保持していることを窺わせる。このような図形化や文字性と図形性の重層性が顕現化する事象は有意味極に限定した言語学による分析では限界があり、非言語記号を包摂する記号論に立脚して考察することが望まれる。

### 7.1. 範疇界にみる言語記号と非言語記号

Bougnoux (2002) は Pierce (1931) の記号階層図<sup>57</sup>を参照し、指標・類像・象徴の三界を通して構築される記号過程において、視覚的痕跡による記号の創出、類像化、像統合、抽象化のような記号創発(谷

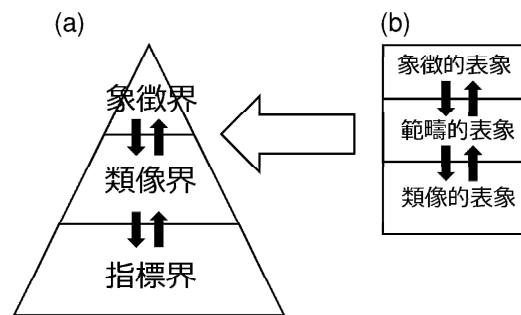


図 18 (a) Bougnoux (2002) の記号階層図、  
(b) Harnad (1990) の表象階層図

口 2016) が起きる動的様相を可視化した。一方、Harnad (1990、1992) は記号接地問題を踏まえて、類像表象・範疇表象・象徴表象の三界を通して稼働する遡及的類推(abduction)を呈示した。図 18 に Bougnoux (2002) の記号階層図と Harnad (1990、1992) の表象階層図を示す。

Derrida (1967) は『De la grammatologie』において、書記言語が音声言語の附属と見なされていた歴史を超越するための鍵概念としてエクリチュールおよび原エクリチュールを提唱すると共に、エクリチュールと表語音節語の係わりにも言及した(小林 2004)。東(2000)は「エクリチュールと呼ぶものは、物と音、イメージ(=類像性、稿者註)とシニフィアン(=象徴性、稿者註)のこの混同可能性である」と解説し、「現在の世界形成と動物的な世界窮乏、あるいはシニフィアンによる対象関係とイメージによる対象関係のあいだをつねに短絡し混同させてしまう「エクリチュール」と呼ばれる一種の通路(=動物的通路、稿者註)」と述べている。このエクリチュールないし動物的通路は Harnad (1992) の範疇的表象に重ね合わせることができる。

手話言語における固定語彙と類辞語彙の間には固定語彙化だけでなく手話言語特有の逆成(Russo 2004、Sandler & Lillo-Martin 2006)がみられ、このような事象は固定語彙にみる象徴性と類辞語彙に

56 <http://typodermicfonts.com/electroharmonix/>[2022年11月閲覧]

57 Peirce (1931) は「第一に記号とは何らかの点であるいは何らかの能力で、誰かに対しほかの何ものかを『表意する』(stand for)ものを言う。第二に、『表意する』という作用であ

る。そして第三に、記号は解釈内容をいわば媒介にしてほかの何ものか、その対象(object)を表意するが、このように記号とその対象を関係づける解釈内容もそれ自体記号である。」と分析している(梶原 2009:75)。

みる類像性の間の相互変換という点において、東(2000)のいう動物的通路に該当することが窺われる。一方、形訳語にみる造語機序も漢字や形訳語にみる文字性と図形性、いわば言語記号と非言語記号の相互変換を含む点において、動物的通路に該当するものであり、固定語彙と類辞語彙の相互変換と共通する記号過程を示すことが窺われる。ここに漢字文化圏と音素文字文化圏にみる記号過程の共通性を窺うことができる。

また Cormier et al. (2013) は英国手話にみる指差が言語学的特性を持つものと、身振りの要素を色濃く帯びており、言語学的な位置づけが困難であり指差に分類できることを示し、手話言語学を内包する言語学が言語における媒体(modality)の重要性を再認識する必要があることを提言することにより、音声媒体と手指(身体)媒体にみる相違を過小評価し、音声言語を対象とする言語学における知見を無謬的に手話言語学にも援用しようとする接近法に警報を鳴らしている。同様に、漢字文化圏における指漢字や表語音節語にみる言語記号と非言語記号の重層性は、紙媒体と手指媒体という媒体の相違を与件とする事象であり、英国手話の指差にみる言語性と身振り性の重層性と通底するものが窺われる。

## 7.2. 文字性と媒体

従来、文字という言語記号は紙媒体をはじめとする保存性の高い媒体と関係づけられていた。しかし De Bray (1997) や尾鍋(2021) はパソコンや聴覚障害者用字幕のような電子媒体にみる文字が顕現化し、文字の持続性という特性に揺らぎがみられるようになってきていることを看破した。

手指媒体を介する指漢字、指仮名、指数字にみる線条性は、従来の紙媒体などを介する文字にみる線条性とは大きく異なるものの、電子媒体にみる文字の線条性と類似する。指漢字や指文字は漢字や仮名を指示対象とする言語記号であるだけでなく、指漢字や指文字自体が広義的に文字と認められるという認識を外延することにより、文字性の拡充に資するものと言える。すなわち、本稿は音素文字文化圏にはみられない漢字文化圏特有の手話の諸現象が超拡張記号図式を用いて適切に記述可能であること、

狭義の言語学的観点からの手話の文字性だけでなく、意味を介さない図形性(および両者の間の変換)も分析可能であることを提示している。

## 8. おわりに

本稿は超拡張記号図式と圏論を用い、指漢字にみる形訳機序や表語音節語にみる義訳機序および音訳機序を記号論的かつ体系的に把握することを試みた。まず拡張記号図式を援用した超拡張記号図式を用いて、形訳、義訳、音訳の機序が音韻極、書記極、手話極、意味極の4極より文脈に応じて選択された3極の3項関係を構築し、有意味極同士ないし非意味極同士を関係づけるものとし、形訳、義訳、音訳の機序にみる個別性および共通性を図式化した。音素文字文化圏の手話言語を題材とする手話言語学により得られた知見による漢字文化圏の手話言語にみる指漢字や表語音節語の分析には困難が伴いがちであったものの、言語学の枠を超えた記号論的視座に立脚し、漢字文化圏にみる手話言語の様相の一端を詳らかにし得たことは、手話言語学を手話記号論に拡充する手法の開発に資する。

次に圏論における関手圏を援用して、形訳、義訳、音訳の機序が3項関係を項とする関手圏における自然変換により構築されることを図式化し、形訳、義訳、音訳の機序が圏論的な同じさを示すことを詳らかにした。すなわち、形訳、義訳、音訳の機序が可変的変換性をもつことを示すことにより、形訳、義訳、音訳の機序を体系的に布置し得る。

また形訳機序にみる有意味極と非意味極の変換を記号階層図ないし表象階層図に連関布置し、指漢字や表語音節語が範疇界をはじめとする類像界と象徴界の間にまたがる動物的通路を往復する動態の様相を詳らかにした。指漢字や表語音節語の記号階層図ないし表象階層図への連関布置は手話言語にみる言語記号と非言語記号の可変的変換の記号論への布置に資する。従来の手話言語学や文字論、記号論などの各分野においては、必ずしも学際的・分野横断的な研究が積極的におこなわれてきたわけではない。畢竟、記号論的視座に立脚した日本手話にみる指漢字や表語音節語の分析は、手話



を題材とする学際的・分野横断的な研究に資するものと考えられる。

### 参考文献

- あべやすし (2012) 「漢字圏の手話の呼称と「規範化」の問題」『愛知県立大学高等言語教育研究所年報』4: 9–21.
- Ann, Jean (1998) Contact Between a Sign Language and a Written Language: Character Signs in Taiwan Sign Language. In: Lucas, Ceil (ed.) *Pinky Extension and Eye Gaze: Language Use in Deaf Communities*, 59–99. Washington D.C.: Gallaudet University Press.
- 阿辻哲次 (2013) 『タブーの漢字学』講談社.
- 東浩紀 (2000) 「想像界と動物の通路: 形式化のデリダ的諸問題」小林康夫編・松浦寿輝編『表象: 構造と出来事』東京大学出版会.
- Benjamin, Motte (1700) *The Lord's prayer in above a hundred languages, versions, and characters. Oratio Dominica ... plus centum linguis, versionibus, aut characteribus reddita & expressa*. Marsh's Library Exhibits. <https://www.marshlibrary.ie/digi/exhibits/show/china#574> [accessed September 2021].
- Boodberg, Peter (1940) Ideography or Iconolatry? *T'oung Pao* 35: 266–288.
- Bougnoux, Daniel (2002) *Introduction aux sciences de la communication*. Paris: La Decouverte. (=水島久光監・西兼志訳 (2010) 『コミュニケーション学講義: メディオロジーから情報社会へ』書籍工房早山.)
- 張栄興 (2011 a) 『台湾手語地名造詞策略研究』台北市: 文鶴出版社.
- (2011 b) 『台湾手語姓氏認知與造詞策略研究』台北市: 文鶴出版社.
- Cormier, Kearsy, Adam Schembri, & Bencie Woll (2013) Pronouns and Pointing in Sign Languages. *Lingua* 137: 230–247.
- Coulmas, Florian (2003) *Writing Systems: An Introduction to Their Linguistic Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Daniels, Pete & William Bright (1996) *The World's Writing Systems*. Oxford: Oxford University Press.
- Debray, Régis (1997) *Transmettre*. Paris: Odile Jacob. (=西垣通監・嶋崎正訳 (2000) 『メディアロジー入門: 「伝達作用」の諸相』NTT 出版.)
- De Francis, John (1977) *Chinese Language: Fact and Fantasy*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Derrida, Jacques (1967) *De la grammatologie*. Paris: Les Éditions de Minuit. (=足立和浩訳 (1971) 『グラマトロジーについて: 根源の彼方に(上・下)』現代思潮社.)

- Eco, Umberto (1976) *A Theory of Semiotics*. Bloomington: Indiana University Press. (=池上嘉彦訳 (2013) 『記号論 I・II』講談社.)
- Flaherty, Mary (2003) Sign Language and Chinese Characters on Visual-Spatial Memory: A Literature Review. *Perceptual and Motor Skills* 97 (3): 797–802.
- Fu, Yi-Ting & Ci-Kai Mei (1986) *Longren Shouyu Gailun [An Introduction of the Deaf Sign Language]*. Shanghai: Xuelin Publishing Company.
- 福島直恭 (2008) 『書記言語としての「日本語」の誕生: その存在を問い直す』笠間書院.
- 布山美慕・西郷甲矢人 (2018) 「比喩理解における意味構造の対応づけ: 不定化した自然変換の探索として」『2018 年度人工知能学会全国大会論文集 (第 32 回)』1–4.
- Harnad, Stevan (1990) The Symbol Grounding Problem. *Physica D* 42: 335–346.
- (1992) *Grounding Symbolic Representation in Categorical Perception*. Dissertation, Princeton University. <https://philpapers.org/rec/HARGSR-2> [2022 年 11 月閲覧]
- 早川杏子・本多由美子・庵功雄 (2019) 「漢字教育改革のための基礎的研究: 漢字字形の複雑さの定量化」『人文・自然研究』13: 116–131.
- 市田泰弘 (2005) 「CL 構文」「CL」『手話文法研究室手話言語学用語集』.<http://slling.net/resources/glossary.htm#e> [2022 年 11 月閲覧]
- 井口亜希子・原島恒夫・田原敬 (2019) 「聴覚障害幼児の言語獲得における指文字の役割に関する文献的考察: 指文字獲得過程と語彙獲得の側面から」『障害科学研究』43 (1): 137–148.
- 石田英敬・東浩紀 (2019) 『新記号論: 脳とメディアが出会うとき』ゲンロン.
- 石野好一 (2019) 「日本語における漢字および文字使用のしくみについて」『岩手大学人文社会科学部創立 40 周年記念国際シンポジウム報告書』31–43.
- 石塚晴通 (1984) 『図書寮日本書紀 研究篇』汲古書院.
- 岩井隆盛 (1954) 「記号としての手話: 言語との対比について」『言語研究』26–27: 152–154.
- 梶原秀夫 (2009) 「記号論: 意味に焦点を当てて」『文京学院短期大学紀要』8: 75–95.
- 鎌田良二 (1964) 「記号としての手話: 言語学の一課題として」『甲南女子大学研究紀要』1: 52–67.
- 神田和幸 (1986) 『指文字の研究』光生館.
- 加藤重広 (2006) 「線条性の再検討」峰岸真琴編『言語基礎論の構築へ向けて (東京外国語大学 AA 研共同研究プロジェクト報告書)』1–25. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- (2021) 「日本語の表記システムとその特徴: 日本語の言語学的文字論として」加藤重広編・岡埜裕剛編『日本語文字論の挑戦: 表記・文字・文献を考えるための 17 章』2–25. 勉誠出版.



- 編・岡墻裕剛編(2021)『日本語文字論の挑戦:表記・文字・文献を考えるための17章』勉誠出版。
- Kennedy, George (1937) A Minimum Vocabulary in Modern Chinese. *The Modern Language Journal* 21 (8): 587-592.
- 北村一親(2008)「手話も「言語」の一つとする」『アルテスリベラレス』82:17-42.
- 小林康夫(2004)「〈エクリチュール〉の衝撃」『現代思想』32(15):118-121.
- 小西信八(1888)「啞生ヲシテ文部大臣ノ祝詞ヲ讀マシメ茗溪會員ノ教ヲ乞フ」『東京茗溪會雜誌』71:7-16.
- (1889)「聾啞教育附發音教授」『大日本教育會雜誌』83:123-141.
- 河野六郎(1994)『文字論』三省堂。
- Krämer, Sybille, Eva Cancik-Kirschbaum, & Rainer Totzke (eds.) (2012) *Schriftbildlichkeit: Wahrnehmbarkeit, Materialität und Operativität von Notationen*. Berlin: De Gruyter.
- 黒田一平(2013)「認知言語学に基づく拡張記号モデルの提唱:ネットワーク・モデルを用いた文字論へのアプローチ」『言語科学論集』19:1-25.
- (2015)「拡張記号モデルに基づく漢字の合成構造の記号論的分析」『認知言語学論考』12:1-44.
- (2016)「メタ言語表現としてのルビの分析:精緻化および概念融合理論の観点から」『日本認知言語学会論文集』474-480.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York NY: Oxford University Press.
- イ・ヒョンファ(2019)「韓国の手話政策と研究の動向:韓国手話法の影響」『第18回手話研究セミナー要旨』.
- 松田龍一・鈴木忠光(1939)「身振り・手真似の研究:数に関するもの(上)」『日本医事新報』860:27-30.
- 松江崇(2021)「古代中国語における漢字の表語現象の諸相」加藤重広編・岡墻裕剛編『日本語文字論の挑戦:表記・文字・文献を考えるための17章』59-80. 勉誠出版。
- 松下行馬(2018)「音階と旋律の関係についての圏論的考察」『学校音楽教育実践論集』2:61-62.
- 峰岸真琴編(2006)『言語基礎論の構築へ向けて』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 箕原辰夫(2020)「音節文字の系譜(2)楔形文字における音節文字の形成」『千葉商大紀要』58(2):107-134.
- 宮本一郎(2001)「中国手話の漢字借用」『日本手話学会第27回大会予稿集』36-37.
- (2002)「中国手話の漢字借用Ⅱ」『日本手話学会第28回大会予稿集』10-13.
- 中村大(2021)「秋田県米代川流域における縄文時代の人口現象と土坑儀礼の変化:圏論に着想を得たモデル化の試み」『環太平洋文明研究(立命館大学環太平洋文明研究センター)』5:55-75.
- 西田龍雄(1986)「言葉と文字:文字学」『言語学を学ぶ人のために』220-254. 京都市:世界思想社。
- 尾鍋史彦(2021)「現代哲学から見た紙の存在理由」『紙パ技協誌』75(4):350-353.
- 乙竹岩造(1929)『日本庶民教育史』目黒書店。
- Peirce, Charles S., Charles Hartshorne (eds.) & Paul Weiss (eds.)(1931-1935) *Collected Papers of Charles Sanders Peirce vols 1-6*. Cambridge: Harvard University Press.
- パン, F.C.・デビー・クラウス(1978)「手話の地名に関する一考察」F.C.パン編・田上隆司編『手話の諸相』55-64. 文化評論出版。
- Rogers, Henry (2005) *Writing Systems: A Linguistic Approach*. Oxford: Blackwell.
- Russo, Tommaso (2004) Iconicity and Productivity in Sign Language Discourse: An Analysis of Three LIS Discourse Registers. *Sign Language Studies* 4 (2) 164-197.
- 西郷甲矢人(2021)「圏論的な〈もの〉の見方・考え方」入門」『認知科学』28(1):57-69.
- ・能美十三(2019)『圏論の道案内:矢印でえがく数学の世界』技術評論社。
- ・田口茂(2019)『〈現実〉とは何か:数学・哲学から始まる世界像の転換』筑摩書房。
- Sampson, Geoffrey (1985) *Writing Aystems: A Linguistic introduction*. Stanford: Stanford University Press.
- Sandler, Wendy & Lillo-Martin, Diane (2006) *Sign Language and Linguistic Universals*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 澤直哉(2020)「かたちとしるしの水際で:羽良多平吉のフォントロジー」『ユリイカ』52(2):264-271.
- ScriptSource editors (2019) Trnsliteration vs. transcription. *ScriptSource*. [https://scriptsource.org/cms/scripts/page.php?it\\_em\\_id=entry\\_detail&uid=gslmka8xq3](https://scriptsource.org/cms/scripts/page.php?it_em_id=entry_detail&uid=gslmka8xq3) [2022年11月閲覧].
- 関沢和泉(2015)「ヨーロッパにおける漢字受容の初期形態について」『東日本国際大学東洋思想研究所・儒学文化研究所紀要』5:75-94.
- 周臻・木本晴夫(2007)「六書原理に基づくロゴデザインシステム」『日本デザイン学会研究発表大会概要集』54:D01.
- 周有光(1961)『漢字改革概論』34. 北京市:文字改革出版社。
- Smith, Wayne & Li-Fen Ting (1979) *Shou neng cheng chyau* [Your hands can become a bridge], vol. I. Taipei: Deaf Sign Language Research Association of the Republic of China.
- & Li-Fen Ting (1984) *Shou neng sheng chyau* [Your hands can become a bridge], vol. II. Taipei: Deaf Sign Language Research Association of the Republic of China.
- 曾徳興(1979)「中国語の発音表記法に関する若干の問題点」『中央学院大学論叢』14(1):65-80.

- Stokoe, William C. (1960) Sign Language Structure: An Outline of the Visual Communication Systems of the American Deaf. *Studies in Linguistics* 8.
- Su, Shiou-Fen & James Hao-Yi Tai (2009) Lexical comparison of signs from Taiwan, Chinese, Japanese, and American sign languages: Taking iconicity into account. In: James In: Hao-Yi Tai & Jane Tsay (eds.) *Taiwan sign language and beyond*, 149–176. Chiayi: National Chung Cheng University.
- 竹田出雲 (1721) 『三莊太夫五人娘』.
- 竹村茂・伊藤政雄・唯野玲子 (1988) 「日本語対応手話: 教育漢字の学年別配当と漢字手話の難易度について」『日本手話学術研究会第 14 回大会研究発表抄録集』16–21.
- 谷口忠大 (2016) 「記号創発問題: 記号創発ロボティクスによる記号接地問題の本質的解決に向けて」『人工知能』31 (1):74–81.
- 寺西隆弘 (2021) 「多義ネットワークにおける動的平衡状態: 図形〇の場合」『日本認知言語学会論文集』21: 266–277.
- 宇賀神尚雄 (1986) 「漢字対応手話の作成と利用」『日本手話学術研究会第 12 回年次講演予稿集』29–30.
- Wei, Li & Zhu Hua (2019) Transcribing: Playful Subversion with Chinese Characters. *International Journal of Multilingualism* 16 (2): 145–161.
- 八杉佳穂 (2009) 「漢字仮名交じり表記考」『国立民族学博物館研究報告』33 (2):139–225.
- 矢崎祥子 (2016) 「日本の文字表現のメリット: 漢字の受容、ヒエログリフとの共通点など」『言語と交流』19: 27–42.
- 米川明彦 (1979) 「文字からみた手話」『待兼山論叢』13:5–19.
- Zipf, George Kingsley (2013) Relative Frequency and Dynamic Equilibrium in Phonology and Morphology. In Kiefer, Ferenc & Sterkenburg, Piet van (eds.) *Eight Decades of General Linguistics: The History of CIPL and Its Role in the History of Linguistics* 55–75, Brill Academic Publications.

〈Original Paper〉

## Finger *Kanji* and Logosyllabic Signs in Japanese Sign Language

Semiotic Consideration of Coinage Mechanisms of Isomorphic, Isonymic, and Isophonic Signs by the *meta* Extended Sign Scheme and Category Theory

**SUEMORI Akio**

*National Institute of Advanced Industrial Science and Technology (AIST), Japan*

This paper describes semiotic consideration of the individuality and commonality among coinage mechanisms of isomorphic, isonymic, and isophonic signs in Japanese Sign Language (JSL). First, a *meta* extended sign scheme was applied to visualise semiosis with ternary structures of elements selected from four elements (phonemes, letters, signs, and meanings) for various mechanisms, which contains a connection between significant or meaningless elements. Second, the category theory was applied to visualise the coinage mechanisms of isomorphic, isonymic, and isophonic signs, which were constructed through a natural transformation in functor category, and indicated natural equivalence. The natural equivalence of three mechanisms suggested systematicity in the coinage mechanisms in Finger *Kanji* and logosyllabic signs in JSL. Third, the significant or meaningless elements in the coinage mechanism of isomorphic signs were layouted in a sign hierarchy. The constellation indicated a border transfer between iconic and symbolic fields.

The results clearly indicated the individuality of the coinage mechanism of finger *Kanji* and logosyllabic signs in sign languages in the east Asian cultural sphere, in fact, finger *Kanji* or logosyllabic signs are not observed in sign languages in Euroamerican countries, phonemic letter cultural spheres. The results also indicated dynamic multilayer of the literal and graphic properties of finger *Kanji* and logosyllabic signs in JSL, which should contribute to consider the universality of the coinage mechanism of sign languages in the east Asian and Euroamerican countries. The systematic and theoretical understanding of the coinage mechanisms of the signs in JSL with linguistic and non-linguistic/iconic signs in symbolic, categoric, and iconic fields will contribute to semiotic consideration of sign languages.

2022年3月1日 受付

2022年11月28日 採択

# 手話辞書学の構築における記号論的接近法

「日本語→日本手話・対訳辞書」の記号図式と記号過程にみる換喩的描写と提喩的一般化

末森 明夫

国立研究開発法人産業技術総合研究所

本稿は本稿の目的は手話辞書学の展開にあたり、「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる記号図式と記号過程の考証に言語学的接近法とともに、記号論的接近法を援用し、手話記号論を手話言語学領域にも受け入れ得るものにあることである。それは手話辞書学において手話言語学を排除するものではなく、手話言語学と手話記号論の対話を通じた知識の構造化をはかるものである。本稿は画像の本質は外延指示であるとみなす Goodman 指示理論、画像の述定図式と註文の指示図式の組み合わせが描写対象を指示するとみなす Bennet 画像理論、画像の本質は不確定対象の非外延指示であり、解釈者による提喩的一般化を経て描写対象の指示がおこなわれるとみなす Beardsley 画像理論を援用し、手話対訳辞書にみる見出し語、挿絵(=画像)、および挿絵説明文(=註文)の記号図式と記号過程を考証した。その結果(1)紙媒体の「日本語→日本手話・対訳辞書」の画像と註文の組み合わせが辞書利用者の学習度をはじめとするさまざまな文脈との作用を通して日本手話語彙(固定語彙・類辞語彙)を指示し得ること、(2)画像と註文の組み合わせによる日本手話の指示は不確定表示の提喩的一般化という記号図式と記号過程に描くことが可能であること、の二点が示唆された。このような知見は電子媒体の「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる手話動画をより利用しやすい様態に改善していくための参考になり得る。

キーワード: 外延指示 述定 換喩的描写 提喩的一般化 不確定表示

## 1. はじめに

### 1.1. 辞書学と歴史言語学

辞書学は辞書にみる情報の多様な表示方法(=辞書情報の記号図式<sup>1</sup>)や編集方法、辞書利用者が辞書情報を解釈する方法(=記号過程<sup>2</sup>)、辞書の歴史などを理論的かつ実践的に考証する学術領域である。また辞書学は辞書をより利用しやすいものに改善していく作業に、辞書学の理論的ないし実践的考証により得た知見を還元していくことを目的に挙げている(Nielsen 2008)。

日本における手話辞書は近代日本にみる聾啞教育の歩みと軌を一にし、主に日本手話語彙の表現方

法を記す紙媒体の辞書として編纂され、日本手話の学習者や日本手話を第一言語とする人(=聾者など)をはじめとする多くの人たちに利用されてきた。21世紀以降は動画を活用した電子媒体の手話辞書も増えており、手話辞書にみる記号図式と記号過程の多様性が窺われる。

また歴史言語学は英和・和英対訳辞書のような二言語対訳辞書を主な資料とし、外来語をはじめとする外国の情報や言説が日本語語彙体系や日本語共同体にどのように受容され、波及していったのかを可視化してきた。たとえば永嶋(1970)や岩堀(1995)は江戸時代後期・幕末期に編纂された蘭和辞書や英和辞書にみる見出し語と註文を通時的に考証し、

1 本稿では、言語や絵画のような記号と記号が指示する事物(ないし概念)(=記号情報)、記号情報を発信ないし受信する者の間にみる関係を説明するための図式を記号図式(sign scheme)とする。

2 本稿では、Peirce・内田(1986)にしたがい、記号過程(semiosis)を「実体・記号(表象)・解釈の三項関係の下に、記号が他の記号に置き換えられ推移していく過程」と定義づけ、記号過程に意味が現れるものとする関係主義に位置づける(榎木 2005)。

さまざまな蘭語や英語が外来語として日本語語彙体系に組み込まれていく過程を詳らかにした。同様に上村(1989)は独和辞書、田中(2004)は仏和辞書を対象とし、幕末期や明治時代に独語や仏語のさまざまな語彙がどのような日本語語彙と対応づけられてきたのかを整理している。鈴木(2015)は英和・和英対訳辞書史と仏和・和仏対訳辞書史の類比による二言語対訳辞書の枠組みを超えた接近法を用い、日本語語彙に対応づけられた英語語彙と仏語語彙がどのように競合ないし共存しながら日本語語彙体系に影響を及ぼしてきたのかを考察している。

一方、20世紀以前の「日本語→日本手話・対訳辞書」に載録された日本手話語彙を調査し、日本手話の変遷を可視化する試み(=手話歴史言語学)は末森(2020)などに限られている。昨今は紙媒体の手話辞書の電子資料化も進められているだけに、電子化した「日本語→日本手話・対訳辞書」資料をより利用しやすい形に改善していき、手話歴史言語学の拡充に資することも望まれる。

紙媒体および電子媒体の手話辞書にみる記号図式と記号過程を理論的ないし実践的に検証する手話辞書学を展開し、手話辞書をより利用しやすいものにしていくことが望まれる。しかし手話辞書学は発展途上の段階にあり、十分な知見の蓄積がはかられてきたとは言い難い面が残る。

## 1.2. 手話辞書史と手話辞書の種類

日本における現存最古の手話辞書は、私立鹿児島盲啞学校が明治35年に刊行した『聾啞教授手話法』(佐土原 1902)とされている。『聾啞教授手話法』は見出し語に日本語語彙を掲げ、対訳語に日本手話語彙を置く「日本語→日本手話・対訳辞書」であり、「日本語→日本手話・対訳辞書」は日本における手話辞書における主流を占めている。

一方、明治時代(1868–1912)や大正時代(1912–1926)に刊行された聾啞教育概説書にも、「日本語→日本手話・対訳辞書」に該当する章が載録されている(『京都府下大黒町待賢校瘖啞生教授手順概略(以下『手順概略』)』(古河 1878:11)、『盲啞教育論』(京都市立盲啞院 1903:114)、『盲啞教育』(渡邊 1906:60)、『古川氏盲啞教育法』

(渡邊 1913:72))。このように明治時代より昭和時代初葉にかけての「日本語→日本手話・対訳辞書」と聾啞教育概説書は密接な関係を示している。

1950年代に入ると、「日本語→日本手話・対訳辞書」のような体裁をとる手話講座テキストがあいついで編纂されるようになる(『手話の手びき』(高橋 1952)、『手話(1)(2)』(京都市ろうあ協会 1954)、『手話日常会話法』(高橋 1957)、『手話日常会話便覧』(天理教手話研究会 1962))。このような手話講座テキストは「日本語→日本手話・対訳辞書」の簡易版ともいえるものであり、日本における手話辞書の系譜に昭和時代中葉の手話講座テキストを布置することもできる。

1960年代に入ると、「日本語→日本手話・対訳辞書」があいついで刊行されるようになる(『手真似』(市村 1962)、『日本手話図絵』(金田 1963)、『手話辞典』(松永・藤本 1963)、『手まね入門』(松永 1964)、『わたしたちの手話(I)』(全日本聾啞連盟手話研究委員会 1969))。20世紀の末には、「日本語→日本手話・対訳辞書」の集大成ともいえる『日本語—手話事典』(米川・日本手話研究所 1997)が刊行されている。

一方1970年代に入ると、日本手話地域変種にみる地名をはじめとする語彙を載録した「日本語→日本手話・対訳辞書」が聾団体などから刊行されるようになった(これは方言辞書に該当するものとも言える)。1990年代には、新しく作られた手話語彙を紹介する『わたしたちの手話 新しい手話 <1>』(全日本ろうあ連盟 1990)のような「日本語→日本手話・対訳辞書」も刊行されるようになった。その他「日本語→国際手話・対訳辞書」のようなものも刊行されている。すなわち20世紀後期には「日本語→日本手話・対訳辞書」などの多様化が進むとともに、辞書利用者が日本手話の学習者だけでなく聾者などにも広がっていったことが窺われる。

しかし見出し語に日本手話語彙ないし手話単語構成要素<sup>3</sup>を掲げ、対訳語に日本語を置く「日本語→日本語・対訳辞書」は『手話・日本語大辞典』(竹村 1999)以外には本格的なものはない。語源辞書に該当する手話辞書も『手話の智慧:その語源を中心に』(大原 1996)に留まっており、国語辞書に該

3 手話単語の構成要素には手形[handshape]、掌向[hand orientation]、位置[location]、動き[movement]がある。

なお「日本語→日本語・対訳辞書」の見出しには手形が置かれることが多い。



当する紙媒体の手話辞書もほとんど見受けられないなど、手話辞書の種類にはかなり偏りがあることは否めない。

### 1.3. 「日本語→日本手話・対訳辞書」の仕様

紙媒体の「日本語→日本手話・対訳辞書」には3種類の仕様がみられる。1つめは対訳語に置いた日本手話単語<sup>4</sup>の表現方法を日本語で叙述する註文仕様、2つめは日本手話単語の図像を布置する画像仕様、3つめは画像と註文を記述する画像註文仕様<sup>5</sup>である。註文仕様の例として『聾啞教授手話法』（佐土原 1902）を図1に、画像仕様の例として『古川氏盲啞教育法』（渡邊 1913）を図2に、画像註文仕様の例として『わたしたちの手話（I）』（全日本聾啞連盟手話研究委員会 1969）を図3に示す。

明治時代より昭和時代初葉にかけて刊行された「日本語→日本手話・対訳辞書」、1950年代の手話講座テキスト、1960年代の「日本語→日本手話・対

訳辞書」のほとんどは註文仕様であるにも拘わらず、1970年代以降の「日本語→日本手話・対訳辞書」は註文仕様のものは皆無である。

一方、明治時代・大正時代の「日本語→日本手話・対訳辞書」においても、『手順概略』（古河 1878:7）には画像註文仕様（図4）、『古川氏盲啞教育法』（渡邊 1913:114）には画像仕様（図2）が窺える。さらに1960年代には画像註文仕様の『日本



図2 『古川氏盲啞教育法』（渡邊 1913:114）にみる図解仕様 緑：見出し語

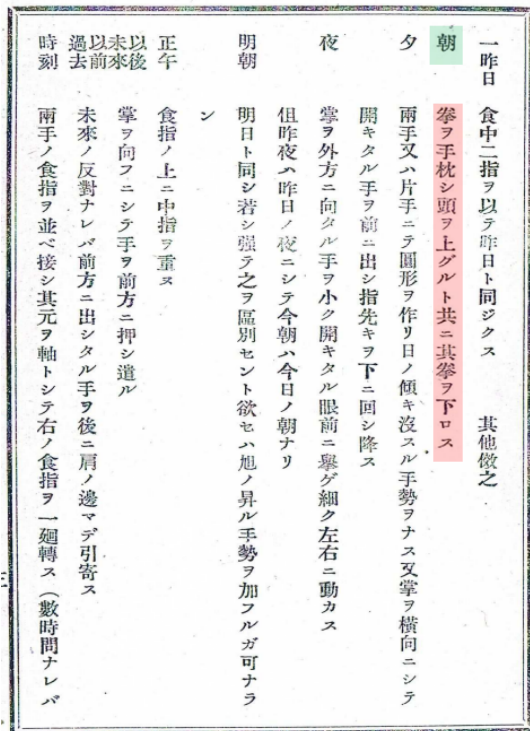


図1 『聾啞教授手話法』（佐土原 1902:3）にみる註文仕様 緑：見出し語、赤：註文

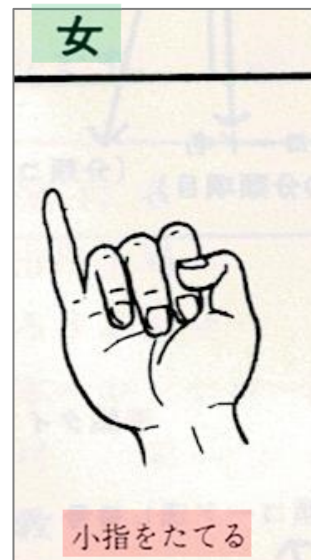


図3 『わたしたちの手話（I）』（全日本聾啞連盟手話研究委員会 1969:3）にみる図解註文仕様 緑：見出し語、赤：註文

4 実際には単語の他に複合語が充てられることも多いものの、本稿では「単語」に統一する。

5 画像註文仕様は、厳密には画像の脇に註文を配置する画像註文「併用」仕様と、画像と註文を異なる頁に配置する画像註文

「並立」仕様に分類できる。しかし並立仕様は明治・大正時代の聾啞教育概説書の一部に限られているため、本稿では画像註文仕様という用語は画像註文「併用」仕様を指すものとして用いる。

手話図絵』(金田 1963)<sup>6</sup>や『わたしたちの手話(Ⅰ)』(全日本聾唖連盟手話研究委員会 1969)が刊行されており、1970年代以降の「日本語→日本手話・対訳辞書」はすべて画像注文仕様である。すなわち「日本語→日本手話・対訳辞書」の系譜には、1960年代まで主流であった注文仕様と1970年代以降の主流である画像注文仕様の二大系統があり、1960年代が両系統の交替を示す分水嶺であったものと考えられる。



図4 『手順概略』(古川 1867:7) 緑:見出し語、赤:注文、黄:図解。見出し語は『東』であるものの、『山』と『東』は画像の標識であり、【東】の形態素の標識に該当する。

6 『手話図絵』は挿絵ではなく写真を用いている。ただ本稿では辞書の画像という視点においては写真と挿絵は同一に論じ得るものとする。

#### 1.4. 「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる記号図式と記号過程

前節で述べたように、「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる手話表現方法の説明は注文から画像注文、さらには動画へと変わってきた。しかしそのような変化に伴い、「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる記号図式と記号過程がどのように変化したのかを題目とする記号論的考証は必ずしも十分にはかられているわけではない。実際、「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる画像は英和・和英辞典にみる挿絵(平松 1991)と言語学的ないし記号論的にどのように異なるのか、「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる記号図式と記号過程は日本手話の学習者と聾者の間でどのように異なるのかなど、課題はつきない。

岩井(1954)と鎌田(1964)はいずれも「記号としての手話」という論文をしたためてはいるものの、手話言語を記号としての身振りに属するものとして扱っており、手話言語を言語記号として位置づけて記号論的に考察したものではない。現在の手話言語学は手話言語にみる指標性や類像性を言語学的に位置づけて論じており、必ずしも記号論的に論じているわけではない。本稿は手話言語学に加えて記号論<sup>7</sup>を援用し、「日本語→日本手話・対訳辞書」における記号図式と記号伝達に関する言説の構造化をはかることにより、手話言語学や手話記号論を踏まえた手話辞書学に資することを試みる。

## 2. 述定

言語(音声や文字など)や絵画をはじめとする記号の特性は媒体と様式に分けることができる。媒体特性に基づく記号の分類に関する言説は汗牛充棟の趣があるものの、様式特性に焦点をあてた記号機能に関する言説は1970年代まではあまりなかった。しかし Goodman(1968)は記号の指示に関する様式に焦点をあてた記号論を展開し、その後の記号論や画像論は Goodman(1968)に始まる Goodman 指示理論の検証ないし反論を通して多様な展開が見せることになった。

7 記号を題目とする学術領域の名称はパースの流れを汲む「記号論[semiotics]」とソシュールの流れを汲む「記号学[semiology]」が知られているものの、本稿ではパースの流れに沿った論旨を展開することより、「記号論」を用いる。

Bennet (1974) は Goodman (1968) の画像による記号図式および記号過程を否定し、画像と註文の組み合わせによる記号図式と記号過程を提唱した。Beardsley (1978) は Bennet (1974) の画像と註文の組み合わせによる記号図式と記号過程をふまえて、不確定表示と提喩的一般化という概念編制に基づく新たな記号図式と記号過程を提唱した。Kulvicki (2006) は Goodman (1968) の指示理論をふまえて、Goodman (1968) ではほとんど考察されなかった画像による記号図式と記号過程における透明性の問題を論じている。

手話辞書にみる画像と註文は対象を指示するとき、どのように役割を分担しているのか (=画像と註文の組み合わせの問題)、手話辞書にみる画像と註文の組み合わせによる指示を受けた対象はそもそも何を示しているのか (=不確定表示と提喩的一般化の問題)、手話辞書の利用者は画像と註文を通して日本手話語彙をどのように把握するのか (=透明性の問題) というようなさまざまな課題は、すぐれて記号論的問題であり、手話辞書における記号図式と記号過程を分析するためには避けては通れないものである。

本稿では「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる記号図式と記号過程を考証し、語・文章と絵画の媒体的枠組みの違いを超えた記号図式・記号過程の普遍性と個別性の可視化をはかるために、記号様式自体を焦点化した Goodman 指示理論 (Goodman 1968) および Bennet (1974)、Beardsley (1978)、Kulvicki (2006) による指示理論を援用する。

## 2.1. 註文と外延指示

Goodman (1968) は記号<sup>8</sup>と指示対象(事物や概念)の間にみる意味論的關係を指示 (reference) と定義し、指示を外延指示<sup>9</sup> [denotation] と非外延指示 [non-denotation] に分けた。記号は指示対象に

貼られる標識 [label] であり、外延指示は標識が指示対象に貼られることにより成立する記号と指示対象の二項關係を意味する (図5a)。なお菅野 (1999: 101) は外延指示の具体的な例として「固有名や一般名による記述 [description]」「絵画・画像<sup>10</sup>による描写 [picture]」「文による描像・述定<sup>11</sup> [picture/description]」を挙げている。固有名、一般名、絵画・画像、文は標識に該当する。

「日本語→日本手話・対訳辞書」の註文仕様は日本手話単語の表現方法を日本語で叙述する。Goodman 指示理論に準ずる場合、註文は「文による描像・述定」に該当し、日本手話の単語を外延指示することになる。すなわち英和辞書のような二言語対訳辞書では見出し語と対訳語が直接関連づけられるのに対し、「日本語→日本手話・対訳辞書」の註文仕様では、見出し語の日本語と対訳語である日本手話単語の間に日本手話単語を外延指示する註文が介在する多段階的關係を示すことになる。

なお「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる註文は対訳語 (=日本手話単語) をどのように手指媒体で表現するかという視覚的映像ないし身体的感覺を辞書利用者に喚起する一方、和英辞書にみる発音記号の表記は、対訳語 (=英単語など) をどのように発音するかという聴覚的映像を辞書利用者に喚起する。いわば対訳語のメタ情報を示すという点におい

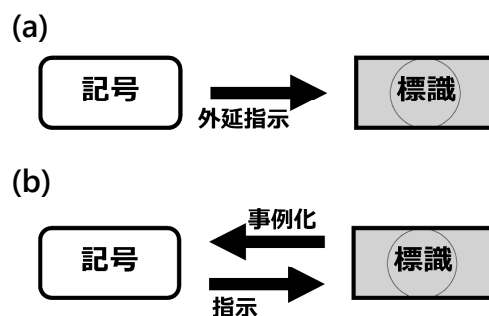


図5 (a) 外延指示、(b) 例示

8 Goodman (1968) の記号論にみる「記号」は [symbol (s)] である。石田・東 (2019) は「記号」を [sign (s)] とし、その中心に文字 [character (s)] を据えた新たな記号論を提唱している。従来の記号論にみる言語中心主義を勘案するならば、従来の手話言語学は [symbolic sign language studies] であり [sign language semiotics] ではなかったと言えるかもしれない。

9 Bennet (1974) は外延指示に該当する概念として指定 [designiation] という用語を用いている。Beardsley (1978) は

外延指示に該当する狭義的用語は設けず、指示 [reference] を用いている。

10 画像理論においては [picture] という用語に対し、画像、絵画、図像、図解をはじめとする多様な邦訳語が用いられるものの、本稿では混乱を避けるため、引用文以外は [picture] を意味する用語は「画像」に統一する。

11 対象 a に性質 F を述定することは「a は F である」という文によってなされ、「F である」に該当する句は名詞あるいは動詞や形容詞を含む文によりなされる。



て、「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる註文と和英辞書にみる発音記号表記は、辞書情報の記号図式における布置の共通性を窺わせる。

## 2.2. 註文と写生

菅野(2015:316)は正岡子規の俳句を対象とした写生論を展開し、「子規が絵画における写生のアナロジーを俳論に持ち込んだ[…]<sup>12</sup>子規が〈写生〉という技法によって〈現代俳句〉というジャンルを文芸の表現領域に創出した…言葉の使用によるイメージ(映像)の製作にあった。」と論じた。このような正岡子規の俳句にみる写生は、註文による描像・述定と符合し、註文は日本手話単語の視覚的映像を辞書利用者に喚起する写生とも見なし得る。

また菅野(2015:319)は子規の俳句を対象とする写生論に Eisenstein (1932) のモンタージュ論<sup>13</sup>を援用し、「俳句の描写法つまり〈写生〉とは、原理的にモンタージュにほかならない[…]映像構成法について、エイゼンシュタインは例えば『モンタージュ的思考は分化的に感覚することの頂点であり、『有機的な』世界を解体することの頂点で』ある、という。[…]物語的統一をそなえた『有機的な』世界を三つの映像に『分化』してしまう映像構成のやり方が展示されている」と論じた。

『聾啞教授手話法』見出し語『朝』<sup>14</sup>の註文は、『拳を手枕し、頭を上ぐると共に、其拳を下ろす』という一行の文でまとめられている(図1)。この文には『拳を手枕し』『頭を上ぐる』『其拳を下ろす』という描像が3箇所あり、日本手話単語【朝】が分化されていることが窺われる。さらに3個の描像は【朝】の形態素ないし構成要素に該当し、註文が【朝】の言語的分節を叙述ものでもあることが窺われる。しかし、この註文は3箇所の描像を通して、【朝】という手話単語を Gestalt 的に外延指示し、【朝】の視覚的映像を辞書利用者に喚起するという記号図式と記号過程を描くことができる。

## 2.3. 見出し語と註文にみる記号図式と記号過程

もともと日本手話の学習者の場合は、註文が外延指示する手話単語を表現することができたとしても、標識としての見出し語を註文が外延指示する手話単語に貼らないと、手話単語の意味・概念を理解することができない、いわば註文が外延指示する指示対象を把握することができない。そのような記号図式は外延指示といえるのであろうか。一方、聾者ならば註文のみで註文が外延指示する手話単語を表現し、意味を理解することもできる。聾者の場合は註文が外延指示する指示対象を把握することができる。このような疑問は「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる記号図式と記号過程を Goodman 指示理論のみで考察するのは無理があるのではないかという考察につながる。

## 3. 換喩的描写

### 3.1. 述語的振る舞い

銭(2020)は Bennet (1974) の言説に関し、「Goodman (1968) が画像の基本的な役割(=画像の述定内容と指示対象)を外延指示と位置づけたのに対し、Bennet (1974) は「画像の基本的な役割は述定内容における述語的な振る舞いであり、述語的な振る舞いのみで何かを外延指示する(=主張内容の指示対象)わけではなく、言語的な標識と組み合わせることにより、主張内容(主張内容の述定内容および指示対象)の真偽が問えるようになる」と解説した。

松永(2017)は Bennet (1974) の言説に部分的に同意しながらも、「描写対象<sup>15</sup>(=画像内容の指示対象、稿者註)は〈絵が何についてのものであるか〉であり、描写性質(=画像の述定内容、稿者註)は〈絵が描写対象にどのような性質を帰属しているか〉である。…描写性質の一部が抽出されて述定内容(=主張の述定内容、稿者註)になる。描写性質がどこまで細かく述定内容(=主張の述定内容、稿者註)として抽出されるかは、当の主張がどれだけ細か

12 […]は引用文における中略を示す。

13 [montage]は仏語で「断片や部品の組み立て」を意味する。映画理論で用いられるときは、個々の映像を組み合わせる別の意味を表現する作業をさす。

14 辞書情報の記号図式にみる日本語ないし漢字表記は『、画像は〈〉、手話語彙は【】、記号の意味・概念は《》で囲む。

15 松永(2017)は Bennet (1974) と異なり、画像の指示対象を部分的に認めているため、「描写対象(=画像内容の指示対象、稿者註)<sup>15</sup>は〈絵が何についてのものであるか〉であり[…]」という文脈が生じることになる。



い述定内容(=主張の述定内容、稿者註)を求めているかによる。」と述べた。

錢(2020)は Bennet(1974)と松永(2017)に準拠し、画像の述定内容・指示対象と主張内容の述定内容・指示対象の相互作用に関する図式をまとめた。その図式を図6に示す。ただし Bennet(1974)に準拠する場合、言語的な標識は文脈に属し、画像の述定内容は画像の指示対象とつながるわけではないことになる。すなわち図6にみる「画像の指示対象」は表示されないことになる。一方、松永(2017)に準拠する場合、画像の述定内容の抽出による主張の述定内容の構築を示す矢印囲み文「指示対象は

描写内容に文脈(外的要因一般)を加味することで得られる。」が附帯的に表示される(図6)。

### 3.2. 画像と註文

『わたしたちの手話(I)』(全日本聾唖連盟手話研究委員会 1969)の冒頭には見出し語『男』の対訳語の位置に画像〈男〉と註文『親指を立てる』がみえる(図7a)。錢(2020)に準拠する場合、辞書利用者が自身の日本手話習得度に応じて画像〈男〉の述定内容を主張の述定内容に抽出し、註文(=文脈)と組み合わせて、日本手話単語【男】を主張の指示対象として把握し、それに見出し語『男』を標識づけするという記号図式と記号過程を描くことができる。

Knowlton(1966)は画像の後概念的位置を提示し、「絵図・映像はあらかじめ言語的な概念としてわかっているからわかるのである(小笠原 2001:7)」と述べた。それに対し、小笠原(2001:7)は記号の同概念的位置を提示し、「意味があらかじめわかっている絵図・映像は icon 記号ではなく symbol 記号として文字記号以外の言語記号として働いていたのである。したがってそれ(=絵図・映像、稿者註)は同概念的位置の記号として働いていたのである。」と述べた。小笠原(2001)に準拠する場合、画像〈男〉は見出し語『男』の icon 記号にすぎないものではなく、註文と組み合わせられることにより【男】を外延指示する symbol 記号として機能し、見出し語『男』と同概念的にある。ここに Goodman 指示理論による画像の外延指示とは異なる記号図式と記号過程が窺える。

### 3.3. 換喩的描写

『わたしたちの手話(I)』(全日本聾唖連盟手話研究委員会 1969)には、見出し語『父』の対訳語の位置に画像〈父1〉と註文1『人差指の先で軽くほおをなでる』があり、画像〈父2〉と註文2『親指をや、上にあげる』がある(図7b)。画像が2つある画像註文仕様と、画像が1つしかない画像註文仕様は、記号図式と記号過程においてどのような相違を示すのであろうか。

菅野(2015:319)は「映像構成法について、エイゼンシュタインは例えば『物語的統一をそなえた〈有機的な〉世界を三つの映像に〈分化〉してしまう映像

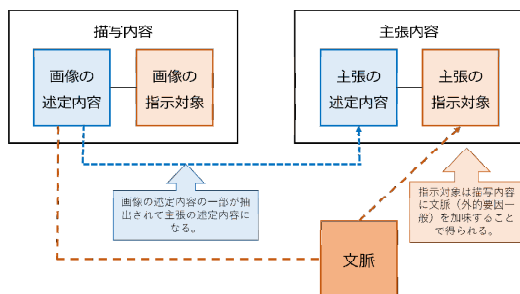


図6 描写内容と主張内容にみる述定内容と指示対象

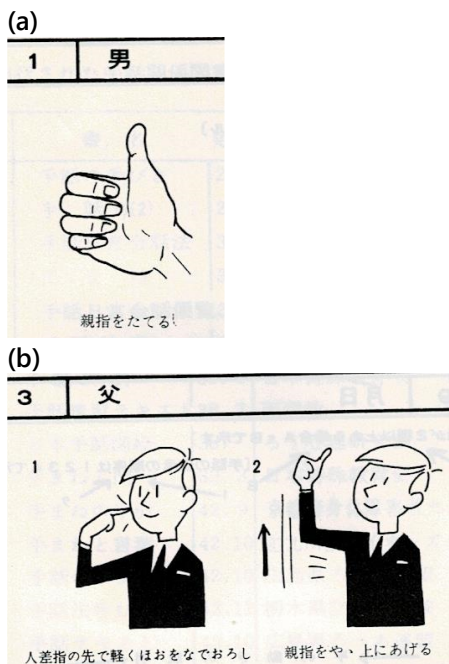


図7 (a)『男』、(b)『父』 (全日本聾唖連盟手話研究委員会 1969)

構成のやり方が展示されている。(1)つかみあう手のクローズアップ、(2)組み打ちのミディアム・ショット、(3)かっと見開いた両眼の最大クローズアップ。[…]モンタージュとはまずもって〈統一的なもの〉、〈有機的なもの〉、あるいは〈物語〉の成立基盤を掘り崩し解体する働きである。[…](1)で描かれた手の仕草が複数の人間の取っ組み合いへと統合されることになるだろう。したがって、(1)は部分で全部を表現するレトリック—換喩[metonymy]—「だったと言わなくてはならない」[…]と述べている。

画像〈父1〉と註文1が組み合わされ、【父】の形態素1を外延指示し、画像〈父2〉と註文2が組み合わされ、【父】の形態素2を外延指示する図式の下に、【父】の形態素1と形態素2が Gestalt 的に【父】を構築する記号図式と記号過程を描くことができる。この記号図式と記号過程に於いて、形態素1と形態素2は【父】の部分でありながらも【父】を描写しており、部分と全体の関係を示す換喩的描写であることが窺われる。

一方、見出し語『父』にみる画像〈男〉は見出し語『父』にみる画像〈父1〉・画像〈父2〉にみる換喩的描写とは異なる視点による換喩的描写を示唆する。それは3次元における日本手話単語【男】を2次元における画像〈男〉に変換する記号過程にみる換喩的描写であり、そのような意味での換喩的描写は画像〈父1〉・画像〈父2〉にも観察される。すなわち3次元空間の下に表示される日本手話単語が2次元空間の下に表示される画像に記号変換されるという記号過程は換喩的描写と位置づけ得る。また画像は2次元における部分が3次元における全体を比喩的に表示するという点において、2次元半という空間的多重構造を示す記号であるものとも考えられる。

### 3.4. 線条性

Saussure は言語が示す原理の一つに線条性を挙げ、絵画には線条性がないものとみなした(松澤2013)。しかし絵画にも線条性は部分的に認められると言説もある(菅野1999)。

菅野(2015:320)は「(1)つかみあう手のクローズアップ、(2)組み打ちのミディアム・ショット、(3)かっと見開いた両眼の最大クローズアップ、[…]映像(1)に映像(2)がモンタージュされるためには、両者の関係はどのようであってはいないのか。[…]過

去に滑り落ちた映像経験に現在の映像経験(視覚)を遡及的に投射する働きである。この働きを「遡及視」と呼ぶことにしよう。[…]映像(1)に含まれた過剰なまなざしを「前方視」と呼んでおこう。」と述べている。すなわち【父】の換喩的描写でもある画像〈父1〉は画像〈父2〉に対する前方視を内包し、画像〈父2〉は画像〈父1〉に対する遡及視を内包しており、この遡及視と前方視は画像〈父1〉と画像〈父2〉の線条性、ひいては日本手話単語【父】にみる線条性を示しているものと考えられる。また画像〈父2〉には手の動きを示す動線が描かれており(図7b)、この動線も【父】にみる時間の流れ、すなわち線条性を示すものと考えられる。

すなわち「日本語→日本手話・対訳辞書」の画像が日本手話語彙にみる線条性を可視化していることが窺われる。画像〈父1〉と画像〈父2〉(図7b)のように起点の手形と終点の手形が異なる場合は、手話単語にみる起点と終点それぞれの形態素の画像を示す例がある一方、画像〈父2〉にみる動線(図7b)のように、起点の手形と終点の手形が同じで位置が異なる場合は、一つの画像の中に動線を図示する例がみられる。これらが手話単語の構成要素(動き)に応じて組み合わされていることが窺われる。

### 3.5. 綴り性

Goodman(1968)は文字と画像を分ける機能の一つに線条性に依拠する綴りを挙げた。この言説に準拠し、菅野(1999:126)は「楽譜、小説、建築設計図などは、綴りをもち、絵画や彫刻はもたない[…]綴りをそなえた記号系は、綴りの同一性に基づいてその写しを作ることができる[…]綴りのない記号系には厳密な意味の写しが存在しない[…]絵画は模写することはできても、写しを取ることは不可能である」と述べた。

しかし前節で示したように、「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる画像は線条性を示し、辞書利用者は画像と註文を参照して、手話単語を再現的に表現する記号図式と記号過程に布置される。すなわち画像や註文は手話単語の綴りであると見なし得る。ここに「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる画像と絵画の特性の違いの一端が窺える。

## 4. 提喩的一般化

### 4.1. 提喩的一般化と画像

松永(2017:17)は Bennet(1974)の言説を部分的に認めつつ、「ラベル(=標識あるいは文脈、稿者註)がない限りあらゆる画像に対して真偽が問えないという主張は明らかに強すぎるだろう。キャプション(=ラベル、稿者註)抜きでも、われわれはその絵が何を描いたものであるか(つまり何を指示しているか)を見分けられることがある」と、画像自体が何らかの指示対象を提示する図式の可能性に言及している。実際、聾者が「日本語→日本手話・対訳辞書」の画像をみて、注文や見出し語の助けを借りることなく、手話単語を再現し、その意味を確認することはできる。

銭(2020)は Beardsley(1978)の言説に言及し、「描写の本質は不特定対象への非外延指示(=不確定表示[indefinite reference])である。画像百科にみる画像はその動物種を一般的に指示するのではなく、そのうちの一つの不確定なある個体(不確定単称名[indefinite singular term])を表示しているだけである。画像による指示は、図鑑項目や文脈に依拠する二次的記号作用(提喩的一般化<sup>16</sup>[synecdochal generalisation])であり、これは描写自体の記号作用ではない」と解説している。図6では画像の指示対象は不確定単称名になり、主張の指示対象が提喩的一般化による動物種の一般的な指示になる。

Beardsley(1978)の言説に準拠する場合、「日本語→日本手話・対訳辞書」の画像はさまざまな人が表現した日本手話単語のうちの一例を描画したものにすぎず、辞書利用者が描写内容(=画像の述定内容と画像の指示対象)を注文や見出し語をはじめとする文脈により提喩的一般化し、主張内容(=主張の述定内容と主張の指示対象)日本手話の共同体における規範と合致する日本手話単語として認識するという記号図式と記号過程を描くことができる。

より具体的には、「日本語→日本手話・対訳辞書」の記号図式と記号過程における提喩的一般化は、どのように表現すれば日本手話の共同体における規

範に合致するような表現になるのかという日本手話単語の表現方法の提喩的一般化と、日本手話単語がもつ意味・概念の提喩的一般化という2段階を経ることになる。日本手話単語の表現方法の提喩的一般化は画像百科の画像にみる提喩的一般化には含まれない記号過程である一方、日本手話単語がもつ意味・概念の提喩的一般化は画像百科の画像にみる提喩的一般化と同じ過程である。ここに「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる画像と、画像百科にみる画像の相違とともに、「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる記号図式と記号過程の重層性が窺われる。

### 4.2. 提喩的一般化と類辞語彙

昨今の手話言語学では手話言語語彙は固定語彙[frozen signs]、類辞語彙[classifier signs]のような手指媒体表示に加えて非手指表示[non-manual signs/markers]により構成されるものとみなす例が一般的である。「日本語→日本手話対訳辞書」の対訳語に置かれる画像は不確定単称名を指示対象とするとした場合、不確定単称名は固定語彙の様態と類辞語彙の様態のいずれを指示しているのだろうか。

Peirce・内田(1986)は「類像記号[icon]より指標記号[index]を経て象徴記号[symbol]が創出される」という記号図式を提唱した。それに対し、菅野(1999:88)は「信号(のような記号、稿者加筆)は象徴記号の要素と類像記号の要素が輻輳している記号系[symbol system]である」と述べ、類像記号、指標記号、象徴記号それぞれが単独で機能するわけではない可能性を指摘した。

Bougnoux(2001)は Peirceの記号図式(Peirce・内田 1986)を参照し、基層に指標記号を据え、その上に類像記号と象徴記号がある階層構造をなす記号図式を提唱している。Harnad(1987)は遡及的類推[abduction]をおこなう類像表象[iconic representation]、範疇表象[categorical representation]、象徴表象[symbolic representation]により構成される階層的な表象図式を提唱している。石田・東(2019)は Harnad(1987)や Bougnoux

16 「換喩」と「提喩」については、換喩を「全体と部分」に基づく譬喩とし、提喩を「全体と種」に基づく譬喩とみなして、「換喩」と「提喩」を区別する言説がある一方、「換喩」と「提喩」を区別せず、「全体と部分」に基づく譬喩と「全体と種」に基づく譬

喩をまとめて「換喩」とする言説もある(瀬戸 2017)。本稿では前者にしたがい、換喩的描写と提喩的一般化という用語の区別をはかる。



(2001)に準拠し、「記号体系や表象図式に通底する記号の様態は、記号を認知し解釈する人の内部で記号が指標、類像、(範疇)、象徴それぞれの領域の間を絶え間なく循環するものである。」と述べている。

菅野(1999:88)や石田・東(2019)の言説に準拠する場合、『自動車』や『飛行機』のような固定的様態と類辞的様態の可逆的表現がみられる語彙にみる画像は固定語彙の様態と類辞語彙の様態が輻輳した不確定単称名を指示し、見出し語との関連づけが十分にはかられたときは象徴記号となるものの、見出し語の影響がゆるやかなものに留まる場合、副詞の意味合いを内包する類辞語彙の様態、いわば類像記号ないし範疇記号と象徴記号が輻輳する言語的記号になるという記号図式と記号過程を描くこともできる。いわば、見出し語、画像、註文、さらには辞書利用者の文脈の連関布置を示す記号図式と記号過程も動的なものであり、画像の主張内容も固定語彙の様態と類辞語彙の様態が輻輳するものであることが窺われる。

## 5. 例示

### 5.1. 例示と表出

Goodman(1968)は非外延指示を例示[exemplification]と表出[expression]に下位分類した。菅野(1999:98)は例示に関し「例示はそれ(=ラベルの指示対象、稿者註)がラベルを媒介として自己指示をおこなう機能であり、この点において外延指示と区別され得る。」と解説している。外延指示と例示の相違を図5bに示す。また菅野(1999:100)は表出に関し「感情、感覚、美意識といった要素をともなうラベル、私たちの心の琴線に触れうるラベルの事例となり、そうしたラベルを指示する記号でない、表出の記号を発揮し得ない」と述べている。なお例示にみる記号図式と記号過程は、図6においては描写内容と主張内容が重なり合うことにより融合的に同一化し、そこに文脈が関与する構図になる。

菅野(1999:82)は例示が固有名や一般名による記述、画像による描写、文による描像・述定とどのように違うのかに関し、次のような具体例をあげて説明

している。「それぞれの記号がもつ記号機能について、その「媒体」[medium]と「様式」[mode]を区別する必要がある。[...]ある特定の曲を描写[...]3通りのやり方[...]第一に、節をつけてある旋律を歌うというやり方。第二に、その曲を構成する音の名を、節をつけずに一様な調子で[...]記述するやり方。最後に、譜面にその曲を書き記すというやり方。媒体に関していうと、第一と第二のものは「聴覚的」であり、最後のは「視覚的」である。[...]第一の様式は「例示」、その他の様式は「記述」ないし「外延指示」として明確に区別できる」。

電子媒体の「日本語→日本手話・対訳辞書」は、対訳語の位置に手話動画を布置する。この手話動画は日本手話単語の例示に該当するものである。紙媒体の「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる註文仕様から画像註文仕様への変化は描写内容を主張内容に抽出変換する記号図式と記号過程という面において基本的な変化はない(図6)。しかし紙媒体の「日本語→日本手話・対訳辞書」から電子媒体の「日本語→日本手話・対訳辞書」への変化は対訳語に布置される日本手話単語の様式自体が変化し、描写内容と主張内容が同一化するという記号図式と記号過程の変化が生じる。

また『悲しい』や『嬉しい』のような感情を表す見出し語にみる手話動画の場合、非手指動作用が明示され、辞書利用者に多様な感情を喚起し得る。すなわち手話動画は手話語彙の意味や概念によっては、例示であるのと同時に表出であるものと考えられる。紙媒体の「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる画像では感情を喚起する非手指動作<sup>17</sup>が省かれがちな点も換喩的描写であり、動画と画像の本質的な相違の一つに換喩的描写の有無にあることが窺われる。

### 5.2. 透明性

Kulvicki(2006)<sup>18</sup>は画像にみる透明性を「ある表象システムSが透明であるとは、〈あるものをSにおいて表象する表象R1〉と〈R1をSにおいて表象するR2〉が統語論的に同一である。また統語論的同一性は意味論的同一性を含意するから、透明な表象シ

17 文法化非手指動作と非文法的非手指動作の区分はこの文脈では考慮しないものとする。

18 Kulvicki(2006)は画像表象(pictorial representation)の必要十分条件を、相対的充満(relative repleteness)、統語論

的敏感(syntactic sensitivity)、意味論的豊富(semantic richness)、透明性(transparency)と位置づけた。



ステムにおいては、ある表象の内容と、その表象の内容は一致する」と定義づけた。

松永(2012)は透明な表象の例として、ある写真を撮った写真を挙げ、透明性が成立する画像的表象は模倣性を内包する一方、透明性が成立しない記述や図表は画像的表象には該当しないとされた。また模倣的ではあるものの透明性が成立しない表象を模倣的表象(例:fMRI、気象レーダー)、描写に描写性質の関係と描写対象にみる描写性質の関係が同一になるような表象を同型的表象とし、模倣的でなくても同型的表象である例はあり得るとした(例:図表)。一方 Kulvicki(2006)は録音や点字も透明な表象であるとしている。

Kulvicki(2006)に準拠した場合、電子媒体にみる「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる動画は透明な表象、紙媒体の「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる画像は透明的ではない模倣的な表象、註文は模倣的でもなく透明的でもない同型的表象という連関布置をはかることができる。すなわち紙媒体の註文仕様から紙媒体の画像註文仕様、さらに電子媒体の動画に変化することにより、見出し語の対訳語(=指示対象)にみる日本手話語彙の類像性は同型表象から模倣的表象、そして透明的表象へと変化してきたことが窺われる。

このような画像から動画への変化は文字から録音への変化と類比的であり、音声媒体と画像媒体における記号図式と記号過程の共通性を示唆している。また盲人の世界において点字と録音が共存している状況は、日本手話の共同体におけるの文字、画像と動画の共存の可能性を示唆しているのは、記号過程における記号図式の共通性(透明性)を示している。

## 6. おわりに

### 6.1. 紙媒体「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる記号図式と記号過程

本稿の目的は手話辞書学の展開のために記号論的接近法を援用し、「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる記号図式と記号過程を可視化することである。それは手話辞書学の転回にあたり、言語学的接近法を排除するものではなく、手話言語学と記号論の対話を通した手話記号論の構築をはかるものでもある。

本稿は画像の本質は外延指示であるとみなす Goodman 指示理論、画像の述定図式と註文の指示図式の組み合わせが描写対象を指示するとみなす Bennet 画像理論、画像の本質は不確定対象の非外延指示であり、解釈者による提喩的一般化を経て描写対象の指示がおこなわれるとみなす Beardsley 画像理論を援用し、手話対訳辞書にみる見出し語、挿絵(=画像)、および挿絵説明文(=註文)の記号図式と記号過程を考証した。

その結果(1)紙媒体の「日本語→日本手話・対訳辞書」の画像と註文の組み合わせが辞書利用者の学習度をはじめとするさまざまな文脈との作用を通して日本手話語彙(固定語彙・類辞語彙)を指示し得ること、(2)画像と註文の組み合わせによる日本手話の指示は不確定表示の提喩的一般化という記号図式と記号過程に描くことが可能であること、の二点が示唆された。

### 6.2. 電子媒体「日本語→日本手話・対訳辞書」の可能性

このような知見は電子媒体の「日本語→日本手話・対訳辞書」にみる手話動画をより利用しやすい状態に改善していくための参考になり得る。たとえば手話辞書利用者(=日本手話の学習者など)には、電子媒体の「日本語→日本手話・対訳辞書」の手話動画を視ただけでは、指示された手話単語を十分に模倣的に再現することができない例も少なくない。一方、紙媒体の「日本語→日本手話・対訳辞書」の画像や註文だけでも、指示された手話単語を模倣的に再現するにあたり困難が伴いがちでもある。いわば電子媒体の「日本語→日本手話・対訳辞書」では手話語彙の全体像が把握しやすいものの、手話単語構成要素の把握が難しくなる傾向がある一方、紙媒体の「日本語→日本手話・対訳辞書」では手話単語の全体像が把握しにくいものの、手話単語構成要素の把握が可能になるという、相反する傾向が窺われる。

すなわち紙媒体の「日本語→日本手話・対訳辞書」には手話単語にみる構成要素(=形態素など)や線条性の明示化という利点があり、電子媒体の「日本語→日本手話・対訳辞書」には、手話単語の全体像や動きなどの明示化という利点があることが窺われる。したがって電子媒体の「日本語→日本手

話・対訳辞書」の改善を図っていくにあたり、手話動画にも静止画像や註文を並立的に布置する仕様も今後の課題としてあげられる。そのような仕様を検証するとき、紙媒体の「日本語→日本語・対訳辞書」の画像註文仕様にみる記号図式と記号過程に関する知見を援用することが望まれる。

また不確定表示と提喩的一般化という概念編制は、手話動画が一つの日本語単語に紐づけられたものであるという前提に立たず、類像語彙の様態と固定語彙の様態が輻輳した不確定単称名の表現にすぎないという前提の下に手話辞書を編纂することが望ましいという言説につながるものとも考えられる。より具体的に述べるならば、電子媒体の「日本語→日本語・対訳辞書」において、対訳語に布置した日本語単語を起点(=典型的な表現)とし、それに紐づけたさまざまな類辞語彙の様態を示す単語群の動画を掲載する仕様も考えられる。このような「日本語→日本語・対訳辞書」は対訳辞書と類義語辞書をあわせたような仕様「日本語→日本語・対訳辞書／類義語辞書」になり、手話辞書利用者の手話語彙習得を促進することが期待される。この仕様を検証することにより、見出し語に固定語彙の様態を示す日本語単語の動画の他に類辞語彙の様態を示す日本語単語や描写述部の手話動画を置く「日本語→日本語・対訳辞書」の拡充をはかることが期待される。

## 参考文献

- Beardsley, Monroe (1978) Languages of Art and Art Criticism. *Erkenntnis* 12 (1) : 95-118.
- Bennet, John (1974) Depiction and Convention. *The Monist* 58 (2) : 255-268.
- Bougnoux, Daniel (2001) *Introduction Aux Sciences de La Communication*. La Découverte. (=水島久光監訳・西兼志訳 (2010) 『コミュニケーション学講義:メディアロジーから情報社会へ』書籍工房早山.)
- Eisenstein, Sergei 著・佐々木能理男訳 (1932) 『映画の弁証法』往来社.
- 古河太四郎 (1878) 『京都府下大黒町待賢校瘡生教授手順概略』(『文部省教育雑誌』64 号附録) 文部省. (=岡本稲丸編 (1980) 「復刻」京都府下大黒町待賢校瘡生教授手順概略」『ろう教育科学』22 (1) : 3-78.)
- Goodman, Nelson (1968) *Languages of Art: An Approach to a Theory of Symbols*. Hackett Publishing Company. (=戸澤義夫訳・松永伸司訳 (2017) 『芸術の言語』慶應義塾大学出版会.)
- Harnad, Stevan (1987) Category Induction and Representation. In Harnad, Stevan (ed.) *Categorical Perception: The Groundwork of Cognition*. 535-565. Cambridge University Press.
- 平松良行 (1991) 「学習用英和辞典に関する一考案:挿絵、写真、図について」『名古屋大学教育学部附属中等高等学校紀要』36:128-130.
- 市村栄 (1962) 『手真似』自費出版.
- 石田英敬・東浩紀 (2019) 『新記号論』Genron.
- 岩堀行宏 (1995) 『英和・和英辞典の誕生:日欧言語文化交流史』図書出版社.
- 岩井隆盛 (1954) 「記号としての手話:言語との対比について」『言語研究』26-27:152-154.
- 鎌田良二 (1964) 「記号としての手話:言語学の一課題として」『甲南女子大学研究紀要』1:52-67.
- 金田富美 (1963) 『日本手話図絵:手まねのてびき』早稲田大学教育心理学研究室ろう心理研究会.
- Knowlton, James (1966) On the Definition of "Picture". *AV Communication Review* 14 (2) : 157-183.
- Kulvicki, John (2006) *On Images: Their Structure and Content*. Clarendon Press.
- 京都ろうあ協会編 (1954) 『手話 (1) (2)』京都聾啞協会.
- 京都市立盲啞院編 (1903) 『盲啞教育論:附・聾盲社会史』京都市立盲啞院.
- 松永端編・藤本敏文監修 (1963) 『手話辞典』日本特殊教育会.
- 松永伸司 (2012) 「画像表象のサーベイ論文」<http://9bit.99ing.net/Entry/13/> [2022年12月閲覧]
- 松永伸司 (2017) 「絵の真偽:画像の使用と画像の内容」『美学』68 (2) : 149.
- 松永端 (1964) 『手まね入門』日本特殊教育協会.
- 松澤和宏訳 (2013) 『自筆草稿「言語の科学」』岩波書店.
- 永嶋大典 (1970) 『蘭和・英和辞書発達史』講談社.
- Nielsen, Sandro (2008) The Effect of Lexicographical Information Costs on Dictionary Making and Use. *Lexikos (AFRILEX-reeks/series 18)* : 170-189.
- 小笠原喜康 (2001) 「Peirce 記号論による Visual 記号の概念再構成とその教育的意義」博士論文:筑波大学.
- 大原省三 (1996) 『手話の智慧:その語源を中心に』全日本聾啞連盟出版局.
- Peirce, C. S. 著・内田種臣編訳 (1986) 『パース著作集 2 記号学』勁草書房.
- 佐土原すゑ編 (1902) 『聾啞教授手話法』私立鹿児島盲啞学校. 鹿児島県図書館所蔵.
- 樫木哲夫 (2005) 「セミオーシス:記号過程がかもしだす知覚世界の動的複雑系」『日本知能情報ファジィ学会 ファジィ システム シンポジウム 講演論文集』21:511-514.
- 銭清弘 (2020) 「画像と言語のアナロジーはどこまで/とれだけ有効なのか」<https://obakeweb.hatenablog.com/entry/picture-language> [2022年12月閲覧]
- 瀬戸賢一 (2017) 「メトニミー研究を展望する」『認知言語学研究』2:79-101.
- 末森明夫 (2020) 「日本手話<明日>の系譜:時間譬喩・複合語短縮・語構成素反転の網状系譜への連関布置」『歴史言語学』9:1-29.
- 菅野盾樹 (1999) 『恣意性の神話:記号論を新たに構想する』勁草書房.

菅野盾樹(2015)『示しの記号:再帰的構造と機能の存在論のために』産業図書。  
鈴木聡(2015)「英語学の視点からみた和独辞書史に関する一考察:明治期から昭和56年まで」『鳥羽商船高等専門学校紀要』37:37-53。  
高橋潔編(1952)『手話の手びき』大阪市民生局。  
高橋潔編(1957)『手話日常会話法』西日本ヘレンケラー協会。  
竹村茂(1999)『手話・日本語大辞典』廣濟堂出版。  
田中貞夫(2004)「佛和辞書(幕末明治期)における訳語の変遷」『一般教育部論集』28:1-13。  
天理教手話研究会編(1962)『手話日常会話便覧』天理教手話研究会。

上村直己(1989)「日本における独和辞書発達小史」『熊本大学教養部紀要 外国語・外国文学編』24:1-14。  
渡邊平之甫(1906)『盲啞教育』松田尚友堂。  
渡邊平之甫編(1913)『古川氏盲啞教育法』文部省。  
米川明彦監修・全日本聾啞連盟日本手話研究所編(1997)『日本語-手話辞典』全日本聾啞連盟出版局。  
全日本ろうあ連盟編(1990)『わたしたちの手話 新しい手話〈I〉』全日本ろうあ連盟。  
全日本聾啞連盟手話研究委員会編(1969)『わたしたちの手話(I)』全日本聾啞連盟出版部。

〈Original Note〉

## Semiotic Approaches to Sign Language Lexicography

Metaphor-Denotation and Synecdoche-Generalisation of Schema and Semiosis in Japanese-Japanese Sign Language Dictionaries

**SUEMORI Akio**

*National Institute of Advanced Industrial Science and Technology (AIST), Japan*

The paper considered schema and semiosis of illustrations and explanatories in Japanese-JSL (Japanese Sign Language) dictionaries to develop *sign language lexicography* using sign language semiotics in addition to sign language linguistics. Concretely, the schema and semiosis with illustrations and explanations of JSL signs were analysed on the basis of various theory of reference proposed by, for example, Goodman (1968), Bennet (1974), Beardsley (1978), suggesting the schema and semiosis with synecdoche-generalisation of denotation of uncertain objects, which were referred by combinations of illustraitons and explanatories, by readers of sign language dictionaries. The results would contribute to improve the Japanese-JSL or JSL-Japanese dictionaries with videos and other electrical contents.

2022年6月29日 受付

2022年12月23日 採択

# CONTENTS

- 〈Original Paper〉 **Finger *Kanji* and Logosyllabic Signs** 1  
**in Japanese Sign Language**  
Semiotic Consideration of Coinage Mechanisms of  
Isomorphic, Isonymic, and Isophonic Signs by  
the *meta* Extended Sign Scheme and Category Theory  
**SUEMORI Akio**
- 〈Original Note〉 **Semiotic Approaches to Sign Language** 22  
**Lexicography**  
Metaphor-Denotation and Synecdoche-Generalisation of  
Schema and Semiosis in Japanese-Japanese Sign Language  
Dictionaries  
**SUEMORI Akio**

---

## Japanese Journal for Sign Language Studies

Volume 31 | Issue 1 | 2022

Publication: Japanese Association for Sign Language Studies

Editor-in-Chief: SUEMORI Akio

Editorial Board: HARA Daisuke & HORIUCHI Yasuo

Office: Bldg.6<sup>th</sup>, Kyoto Research Park, 93 Awatacho, Chudoji, Shimogyo, Kyoto, 600-8815, Japan

---



---

## 『手話学研究』 31 巻 1 号の刊行について

---

『手話学研究』 31 巻 1 号への投稿（投稿期間：2021 年 7 月 1 日～2022 年 6 月 30 日）は計 3 件にのぼった。しかし 3 件の査読をおこなう中、投稿取り下げが 1 件あり、最終的な本号所収論文は 2 件になった。

（編集委員会）

---

## 『手話学研究』 第31巻 第1号

2022 年 12 月 28 日発行 ISSN: 1884-3204

編集・発行：日本手話学会 会長：末森 明夫

編集委員長：末森 明夫

編集委員：原 大介・堀内 靖雄

事務局：600-8815 京都市下京区中堂寺栗田町 93 京都リサーチパーク 6 号館 3 階

(有) セクレタリアット内 Email: jaslinfo@jasl.jp

---